岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第175集

糀口Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

糀口Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保護し後世に伝えていくことは、県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域の発展に欠かすことのできない社会資本の充実も重要な施策であります。特にも幹線道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。このような埋蔵文化財の保護と開発との調和ある施策も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書の糀口Ⅰ遺跡は、軽米町西方の観音林丘陵に位置し、平成2年度の発掘調査によって、縄文時代の集落跡や狩り場跡、奈良時代の集落跡等が発見されました。特に、縄文時代早期の遺構と遺物が発見され、県北部の歴史を解明するうえで貴重な資料を得ることができました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

おわりに、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜わりました軽米町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

平成3年11月

財団法人　岩手県文化振興事業団
理事長　工藤　巌

例　言

1．本報告は岩手県九戸郡軽米町大字晴山第24地割字泉沢19ほかに所在する裃口（こうじぐち）Ⅰ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、一般国道340号の改良工事に伴い記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は、岩手県土木部と岩手県教育委員会との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び調査略号は、次のとおりである。

遺跡番号　ＩＦ－0252　　調査略号　ＫＧＩ－90

4．調査面積は4,563㎡である。野外調査は平成2年6月1日から8月24日まで、調査資料の整理は平成2年11月1日から平成3年3月31日まで実施した。

5．野外調査は斎藤　實・千葉孝雄があたり、室内整理および報告書の執筆は千葉孝雄が担当した。

6．分析・鑑定は次の方々及び機関に依頼した。（敬称略）

火山灰・胎土の分析・鑑定	三辻　利一	（奈　良　大　学）
石質鑑定	佐藤　二郎	（佐藤地質工学研究所）
木炭鑑定	早坂松二郎	（岩手県木炭協会）

7．本報告書作成にあたり、次の方々より御指導・御助言をいただいた。（順不同・敬称略）

熊谷　常正（岩手県立博物館）、三浦　圭介・畠山　昇・岡田　康博（青森県埋蔵文化財調査センター）、小林　和彦（八戸市博物館）、長尾　正義（三沢市歴史民俗資料館）

8．遺跡の基準点測量は田端測量設計株式会社に、空中写真撮影は㈲ＮＲＣ岩手空撮に委託した。

9．野外調査にあたっては、軽米町教育委員会及び地元の方々の御協力をいただいた。

10．本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本文目次

序
例　言
Ⅰ．調査に至る経過 …… 1
Ⅱ．遺跡の立地と環境 …… 1
1．遺跡の位置 …… 1
2．地形 …… 1
3．地質 …… 2
4．基本層序 …… 3
5．周辺の遺跡 …… 7
Ⅲ．調査方法と整理方法 …… 8
1．野外調査 …… 8
(1)グリッドの設定 …… 8
(2)粗掘り・遺構検出 …… 8
(3)遺構の命名 …… 9
(4)精査と実測 …… 9
(5)写真撮影 …… 9
2．室内整理 …… 9
Ⅳ．検出された遺構と遺物 …… 13
1．竪穴住居跡 …… 13
2．土坑 …… 19
3．陥し穴状遺構 …… 26
4．焼土 …… 27
Ⅴ．遺構外出土遺物 …… 29
1．土器 …… 29
2．石器 …… 31
Ⅵ．まとめ …… 35
1．遺構 …… 35
2．遺物 …… 39

図版目次

第1図　遺跡周辺地形図 …… 2
第2図　基本層序 …… 3
第3図　軽米町内遺跡分布図 …… 5, 6
第4図　グリッド配置図 …… 8
第5図　遺構配置図 …… 11, 12
第6図　第1号竪穴住居跡・出土遺物 …… 14
第7図　第1号竪穴住居跡出土遺物 …… 15
第8図　第2号竪穴住居跡・出土遺物 …… 17
第9図　第2号竪穴住居跡出土遺物 …… 18
第10図　第1号土坑・出土遺物 …… 19
第11図　第2号土坑 …… 20
第12図　第3号土坑 …… 20
第13図　第4号土坑 …… 20
第14図　第5号・6号・7号土坑 …… 22
第15図　第8号土坑 …… 23
第16図　第9号土坑 …… 24
第17図　第10号土坑・出土遺物 …… 25
第18図　第11号土坑 …… 26
第19図　第1号陥し穴状遺構 …… 27
第20図　第2号陥し穴状遺構 …… 28
第21図　第1号焼土 …… 28
第22図　第2号焼土 …… 28
第23図　第3号焼土 …… 28
第24図　第4号焼土 …… 28

第25図　第5号焼土…… 28
第26図　遺構外出土遺物　土器(1)…… 32
第27図　遺構外出土遺物　土器(2)…… 33
第28図　遺構外出土遺物　石器…… 34

表目次

第1表　周辺の遺跡一覧表 …… 7
第2表　県内早期末葉竪穴住居跡の比較 …… 35
第3表　本遺跡土坑の分類 …… 37
第4表　本遺跡出土の赤御堂式土器の位置づけ …… 42
第5表　県内赤御堂式土器の植物性繊維の含有の有無 …… 43

写真図版目次

写真図版1　調査区全景（航空写真）…… 51
写真図版2　調査区遠景・基本土層 … 52
写真図版3　第1号竪穴住居跡 …… 53
写真図版4　第2号竪穴住居跡 …… 54
写真図版5　第1・2・3・4号土坑 …… 55
写真図版6　第5・6・7・8・9号土坑 …… 56
写真図版7　第10・11号土坑 …… 57
写真図版8　第1・2号陥し穴状遺構、第1・2・3・4・5号焼土 … 58
写真図版9　遺構内出土遺物 …… 59
写真図版10　遺構内出土遺物、遺構外出土遺物(1) …… 60
写真図版11　遺構外出土遺物(2) …… 61

Ⅰ．調査に至る経過

九戸郡軽米町地内における一般国道340号の道路改良工事は、観音林南側を迂回する総延長2,600ｍにわたり、昭和60年度に着工し、平成3年度完成の予定である。

これに関連する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、岩手県土木部と岩手県教育委員会との間で協議がなされ、改良工事に関連する遺跡の分布調査は昭和60年12月3日付け「二土第1334号」による依頼を受けた県教育委員会文化課が昭和60年12月23・24日に実施した。さらに県教育委員会が平成元年9月5日付け「教文415号」により埋蔵文化財に関連する土木事業等について照会し、9月29日付けの回答をうけて発掘調査を実施することとした。

これにより糀口Ⅰ遺跡については、平成2年度の岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの発掘調査事業に組み入れられ、平成2年6月1日付け委託契約により調査に着手することとなった。

Ⅱ．遺跡の立地と環境

1．遺跡の位置（第3図）

糀口Ⅰ遺跡の所在する軽米町は、県都盛岡市から北方約64㎞、岩手県の北端に位置する。北は青森県名川町・南郷村・階上町、南は山形村・九戸村、東は種市町・大野村、西は二戸市に隣接し、総面積は242.61㎞である。本遺跡は、東日本旅客鉄道金田一温泉駅の東約6㎞、折爪岳の北約6㎞、国道340号の西側に位置する。同地点は北緯40度19分1秒、東経141度22分42秒付近にある。

2．地形（第1図）

遺跡の周辺地域は北上山地の北端に位置し、西に折爪岳山地や猿越峠山地がほぼ南北に連なる。この地域の最高点は標高852.2ｍの折爪岳で、主分水嶺を形成している。その東側には標高300ｍ前後の、概して低く緩やかな丘陵が広く認められる。これは北上山地に広く分布する隆起準平原の名残りである。

山地東側にはこれらの山地と平行するように瀬月内川が北流する。瀬月内川の河道は、小規模な曲線を示すが、全体的に構造谷の性格を有して直線的であり、氾濫平野及び谷底平野は幅の狭いものである。

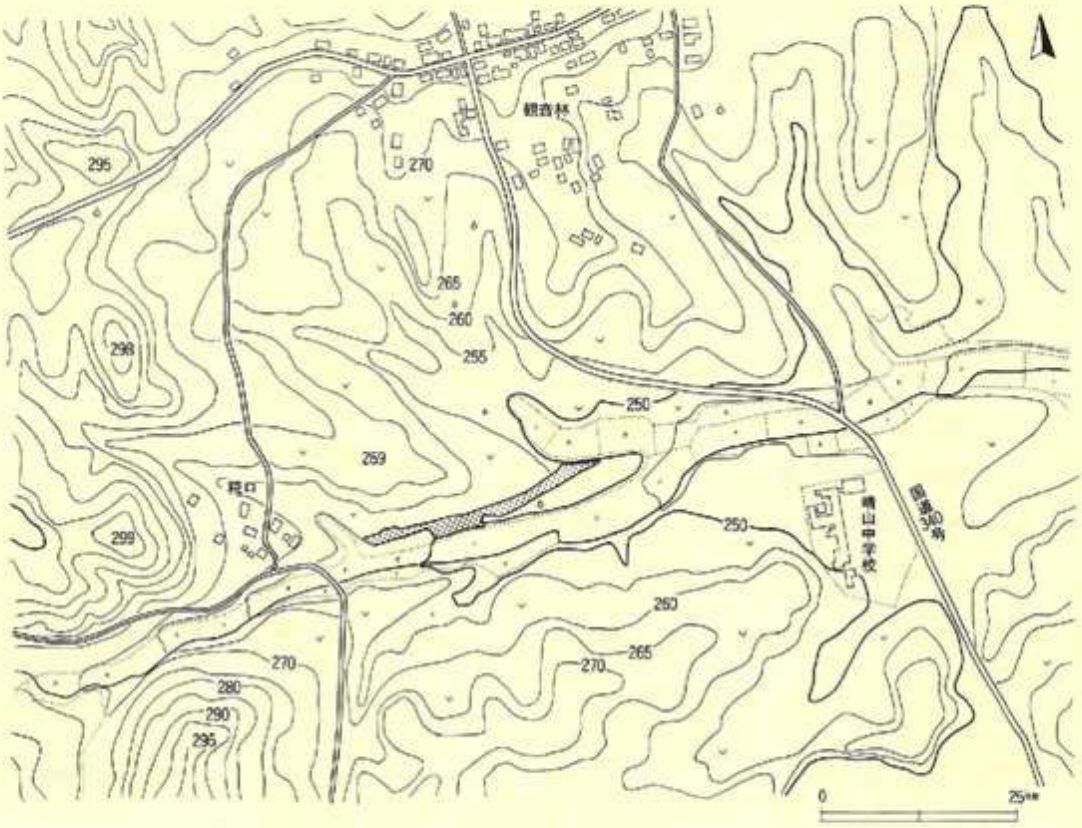
折爪岳山地と瀬月内川に挟まれた丘陵は狭隘に南北に伸びて、中村付近より北部では比較的まとまった面的広さをもってより北方に伸びている。これが観音林丘陵で、標高200～300ｍ

と起伏量も少なく、なだらかな地形となっている。同丘陵からは、水量の少ない沢が数本瀬月内川に注ぐが、それらの沢による開析は部分的であり、谷底平野の規模も小さい。したがって明瞭な尾根筋をつくることはなく、緩やかな斜面が狭い谷底平野に漸移する。

本遺跡は、同丘陵の縁辺部ないし谷底平野の漸移部に位置し、谷底平野からの比高は1～7m、標高は248～256mである。平坦部と斜面によって構成され、現況は平坦部が畑地、斜面は荒れ地と山林である。周辺の遺跡には、沢を挟んだ東側丘陵上に大堤Ⅱ遺跡が、その東約4kmには皀角子久保Ⅵ遺跡が位置する。

3．地質

地質の走行方向は瀬月内川の流路の方向と等しく、地形の走行方向に一致する。主分水嶺は南北に走るが、その西側の馬渕川寄りの山地斜面は第三紀層が基盤として露われるのに対し、瀬月内川寄りは直接古生層のスレート・チャート等が基盤となっている。その上にはローム・軽石といた火山砕屑物が広い範囲にわたって分布し、下位に火砕流を伴う。観音林から西側の山地に向かっては、火山灰の下にかなりの厚さの亜円礫を主にした礫層が見られる。谷底平野



第1図　遺跡周辺地形図

は、河床堆積物である砂・礫・泥が堆積している。

本遺跡の基盤層は火山砕屑物で、表土の土壌は火山灰に由来する黒ボク土（駒板統）である。

4．基本層序（第2図）

調査区では基本的には右図のような層序が観察される。斜面部ではⅡ・Ⅲ層を、調査区東端ではⅡ層を欠落している。

第Ⅰ層　黒色土（7.5ＹＲ２/１）シルト

耕作土。東側では発泡性の白色の浮石を含む。荒れ地・山林の表土は腐葉土主体の褐色土である。層厚は10～30㎝。

第Ⅱ層　黒色土（7.5ＹＲ２/１～1.7/１）黒ボク

第Ⅰ層よりしまりがない。平坦部では20～30㎝の層厚であるが、他の区域ではⅠ層・Ⅲ層との混土をなし、独立した層としては明確でない。

第Ⅲ層　黒褐色～褐色土（10ＹＲ３/２～４/４）中世浮石相当層

砂質シルトで、粘性に乏しい。最上部は黒色が卓越し徐々に明るい褐色となる。中位は暗褐色が強まり、固く締まる。下位は第Ⅳ層への漸移部を形成し、南部浮石を含むため明るみを増す。やや粘性がある。層厚は40～50㎝。

第Ⅳ層　明橙色～明黄褐色（10ＹＲ７/８～６/８）南部浮石層

平坦地は層厚30～50㎝で安定した堆積状況を示し、斜面上方では、５㎝程度の堆積である。

第Ⅴ層　暗褐色～黒褐色土（10ＹＲ３/３～２/３）シルト

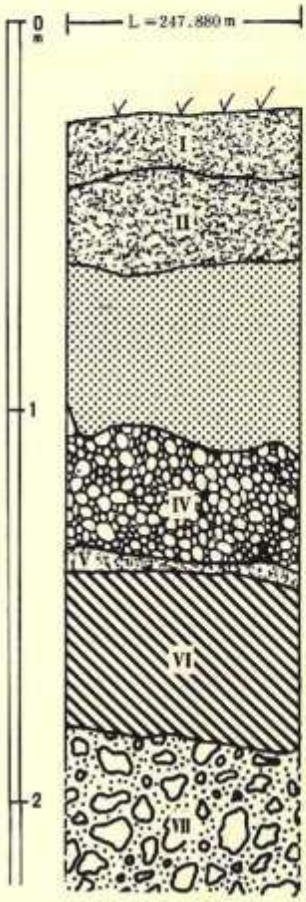
粘性があり、南部浮石粒を少量含む。層厚３～７㎝。

第Ⅵ層　褐色土（10ＹＲ３/３～２/３）八戸火山灰

粘性があり、上部に南部浮石粒を少量含む所がある。層厚40～50㎝。

第Ⅶ層　黄褐色～灰白色土（10ＹＲ６/５～３/８）粘土質土

粗砂、礫を多量に含む。



第２図　基本層序

5．周辺の遺跡（第３図、第１表）

岩手県教育委員会文化課による遺跡の分布調査によると、軽米町の集落跡と遺物散布地は400カ所である。これは八戸自動車道建設や畑作総合整備事業に伴うものであったため、軽米

町の北西部に遺跡数が集中している。今後精緻な分布調査が行われることにより、遺跡数及び分布の範囲は更に増加、拡大すると思われる。

これらの遺跡のうち、発掘調査により10数カ所の概略が把握されている。調査された遺跡から軽米町の歴史を概観してみることにする。

縄文時代では、早期の遺構や遺物が土弓Ⅰ遺跡、馬場野Ⅱ遺跡において確認されており、押型文、貝殻文、表裏縄文の土器が出土している。縄文時代前期の遺跡としては、叺屋敷Ⅰａ・Ⅰｂ遺跡、大日向Ⅱ遺跡などが調査されている。住居跡はこの5遺跡で8棟確認されている。縄文時代中期の遺跡では、前半に位置する竪穴住居跡は発見されておらず、叺屋敷Ⅰａ遺跡の34棟に代表されるように大木9・10式といった中期末葉のものが多い。縄文時代後期になると住居跡の数は逆に現象している。後期中葉には馬場野Ⅱ遺跡の湧水地付近または尾根の頂部が住居の場として選ばれている。大日向Ⅱ遺跡では、後期後半の竪穴住居を中心とする集落跡が確認されている他、屈葬人骨が埋葬された土坑が検出されている。縄文時代晩期遺跡には、馬場野Ⅱ、駒板遺跡などで住居跡が確認されているが全体的には減少傾向を示している。近接の大堤Ⅱ遺跡からは、縄文時代の遺構では陥し穴状遺構と土坑が検出されている。

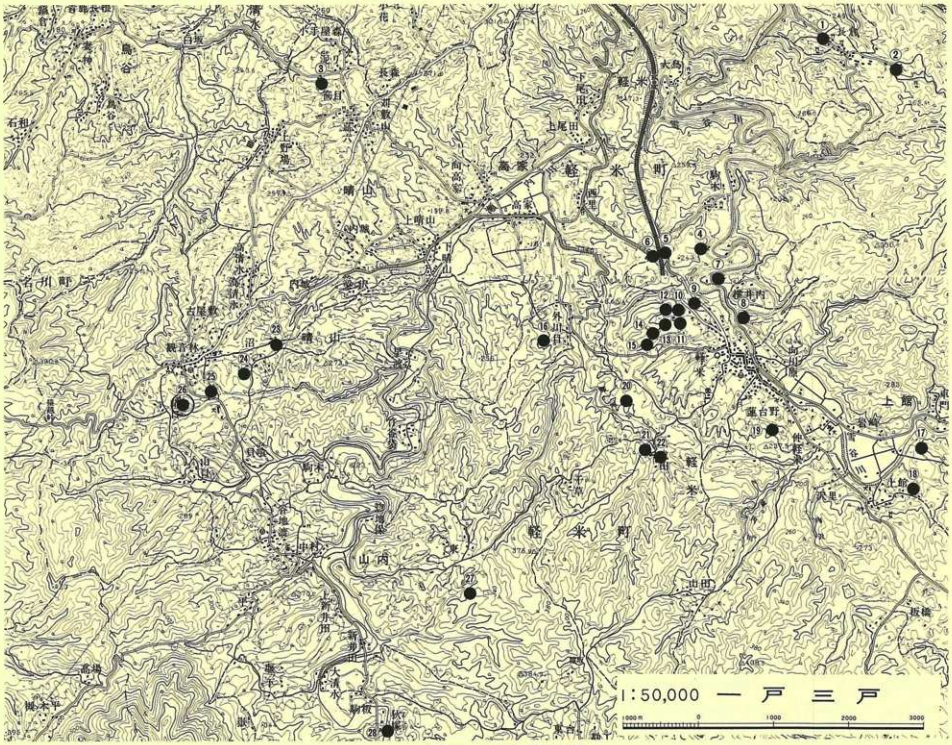
弥生時代の遺跡としては馬場野Ⅱ遺跡が上げられる。土器から弥生時代前期に位置づけられている。また君成田Ⅳ、大日向Ⅱ遺跡からは遠賀川系土器が出土しており、当時の交流を窺わせる。

叺屋敷Ⅰａ遺跡・大日向Ⅱ遺跡・諏訪の森遺跡からは、本遺跡からも出土している後北C_2・D式の土器が発見されている。

古代の遺跡も相当数あり、発見されている住居跡は30棟を越える。大堤Ⅱ遺跡からは平安時代の土坑が、皀角子久保Ⅵ遺跡からは同時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡の他、畑地跡等が検出されており、本遺跡で検出された奈良時代の竪穴住居跡を含め、本遺跡の周辺では奈良～平安時代を通じて集落が営まれていたことが分かる。

中世、近世の遺跡は、城館跡をはじめ、軽米町教育委員会によって発掘調査が進められている玉川鉄山跡などが知られている。

以上、本遺跡周辺では時代によって疎密はあるものの、人間の営みが縄文時代の早期から綿々と続いていることが分かる。今後の調査によって、更に詳しい資料が加えられ、軽米町の歴史の復元が進むものと思われる。



①長倉No.14遺跡
②長倉遺跡
③下野場館跡
④大鳥Ⅰ遺跡
⑤土弓Ⅰ遺跡
⑥土弓Ⅲ遺跡
⑦駒木Ⅶ遺跡
⑧駒木遺跡
⑨大日向Ⅱ遺跡
⑩叺屋敷Ⅰa遺跡
⑪叺屋敷Ⅰb遺跡
⑫叺屋敷Ⅲ遺跡
⑬叺屋敷Ⅱ遺跡
⑭馬場野Ⅰ遺跡
⑮馬場野Ⅱ遺跡
⑯御前水古墳
⑰平中遺跡
⑱上館遺跡
⑲諏訪の森遺跡
⑳君成田Ⅳ遺跡
㉑君成田Ⅴ遺跡
㉒君成田Ⅵ遺跡
㉓沼Ⅰ遺跡
㉔皂角子久保遺跡
㉕大堤Ⅱ遺跡
㉖糀口Ⅰ遺跡
㉗駒板遺跡
㉘狄塚Ⅰ遺跡

第3図　軽米町内遺跡分布図

第1表　周辺の遺跡一覧表

	遺跡名	種別	所在地	調査報告書	調査結果	
					主な遺構	主な遺物
1	長倉 No14	散布地	大字長倉	岩埼報第10集	土坑	
2	長倉 I	散布	〃 長倉字一本木	25	土坑	
3	下野場館	館跡	〃 晴山字下野場			
4	大島 I	散布地	〃 軽米字大島			
5	土弓 I	集落跡	〃 土弓	59	土坑	縄文早期
6	土弓 II	集落跡	〃 軽米字土弓			
7	駒木 VII	散布地	〃 上館			
8	駒木	散布地	〃 軽米字駒木			
9	大日向 II	散布地	〃 軽米第12地割字土弓	100	住居跡（縄文前・中・後期、奈良・平安）、土坑、陥し穴	縄文後期、亀形土製品
10	弘原敷 I a	集落跡	〃 軽米字弘原敷	61	住居跡（縄文中・後期、奈良・平安）、土坑	縄文中・後期、青竜刀石器
11	b	〃	〃	63	住居跡（縄文前・中期、平安、）、土坑、陥し穴	縄文前・中・後・晩期
12	II	〃	〃	45	住居跡（縄文中期・後期）、土坑	縄文中～後期
13	II	〃	〃	47	住居跡（縄文中期・後期）、土坑	縄文前・中・後期
14	馬場野 I	集落跡	〃 軽米字馬場野	68	住居跡（縄文中期・後期）、土坑、陥し穴	縄文中期・後期
15	馬場野 II	集落	〃 軽米字馬場野	99	住居跡（縄文早～晩期、弥生）、土坑、陥し穴	縄文早期・後期・弥生
16	御前水古墳	古墳	〃 軽米字外川目			鉄手刀
17	平中	散布地	〃 上館字平中			
18	上館	館跡	〃 上館字下町			
19	源氏の森	散布地	〃 軽米字源氏の森			
20	君成田 IV	集落跡	〃 軽米字君成田	62	住居跡（縄文中・後・晩期、奈良）、土坑、陥し穴	縄文中～後期
21	君成田 V	集落跡	〃 軽米字君成田			
22	君成田 VI	集落跡	〃 軽米字君成田			
23	沼 I	散布地	〃 晴山字沼			
24	息角子久保 VI	散布地	〃 晴山字息角子久保	129	住居跡（平安）掘建柱、井水路跡、土坑、陥し穴	土師器、鉄製品、他
25	大堀 II	散布地	〃 晴山字大堀	119	土坑、陥し穴	縄文後・晩期
26	鳴口 I	散布地	〃 晴山字鳴口	（本報告書）	住居跡（縄文早期、奈良）、土坑、陥し穴	縄文早期
27	駒板	集落跡	〃 山内字駒板	98	住居跡（縄文後・晩期、奈良、中世）、土坑、陥し穴、鍛冶鉄造跡	縄文後・晩期、土師器
28	狐塚 I	集落跡	〃 狐塚字川向			

Ⅲ．調査方法と整理方法

1．野外調査

(1) グリッドの設定（第4図）

調査区域は南北10～20 m、東西約350 mで緩やかな曲線を描き細長く延びている。グリッドは全域を網羅するため、以下のように設定した。

二戸土木事務所が設置した中心杭No.44を基準点1とし、これと中心杭No.57を結ぶ直線を延長させてこれを基準線とした。次に、基準点1から西25 m、北15 mの点を起点に基準線に平行する50 m毎のメッシュを組んで大グリッドとし、西からⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区…と命名した。更に、大グリッドを一辺5 mのメッシュに小区画し、北から南へA，B，C，…、西から東へ1，2，3…の名を与え、大グリッドとの組み合わせでⅠ区A 1、Ⅶ区J 10のように呼称した。

基準点の平面直角座標第X系による成果値（X、Y）、及び杭高（H）は以下のとおりである。

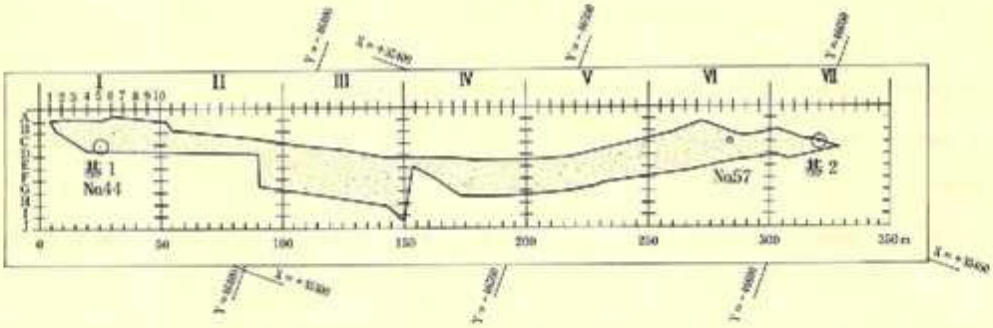
X＝35328.079 m　　Y＝46326.020 m　　H＝255.895 m

基準線は、真北に対し約21°東へ偏っている。

(2) 粗掘り・遺構検出

遺跡全体の状況を把握するために、2 m幅の試掘トレンチをⅠ区からⅦ区まで調査区の外郭線に沿って設定し、更にそれに直交するトレンチを概ね20 m間隔に同じ幅で数本入れた。その結果西端部のⅠ区から縄文・土師の細片が比較的多く出土したほかは、Ⅰ層、Ⅱ層とも遺物はごく僅かまたは皆無であり、この時点では遺構は全く検出されなかった。調査区中央部Ⅲ区の斜面下方は黒色土が厚く堆積し、遺物の出土もなかったことから、トレンチのみで調査を終了した。

調査区東端のⅦ区は全面表土を除去したが、耕作土の直下は南部浮石層で、遺構は検出され



第4図　グリット配置図

す、遺物もわずか2片だった。八戸火山灰層上面でも遺構・遺物は検出されなかった。

以上のような試掘状況から、Ⅲ層上面とⅣ層上面において検出作業をすることにし、遺物が比較的多いⅠ区を除き、他は重機を使用することにした。ただし、Ⅲ層は厚い層を形成し漸移層となっていることからⅢ層の中位面でも検出作業を行い、都合3回に分けて遺構検出を行った。Ⅰ区ではⅡ層およびⅢ層（の一部）までは手作業によって検出と遺物の取り上げを行ったが、Ⅲ層からは出土遺物がなかったことから、それ以降の調査には重機も使用した。

(3) 遺構の命名

野外調査時は種類毎・検出順に命名したが、検出された遺構数が少なかったので、室内整理の段階で遺構名の変更を行った。変更した遺構名は、種類毎・西側から順に番号を付し、例えば第5号土坑、第2号焼土のように命名した。

(4) 精査と実測

竪穴住居跡は4分法で、土坑・陥し穴遺構は2分法で精査を行った。遺構の実測図作成にあたっては、グリッド軸にあわせた1mメッシュを基本とする簡易遣り方を設定し、20分の1の縮尺を基本に、必要に応じて10分の1縮尺も併用した。基本層位はローマ数字、埋土の土層は算用数字で表した。

(5) 写真撮影

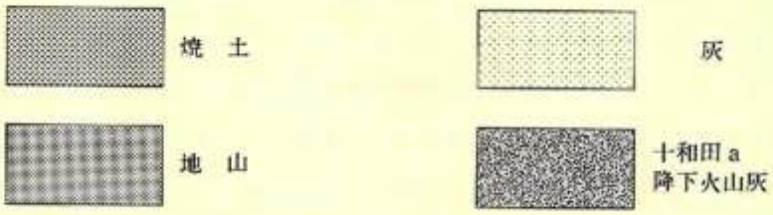
野外調査での写真撮影は35㎜判（モノクロ、カラー・リバーサル）の2台と6×7㎝判のモノクロ1台を使用した。また、野外調査がほぼ終了する段階で、空中写真を撮影した。

2．室内整理

遺物の整理は野外調査時に水洗と注記の大部分を行い、他は室内整理の最初の段階で行った。その後、接合・復元・仕分け・登録の順に進めた。さらに、報告書掲載遺物の実測や拓本・写真撮影・計測・トレース・図版作成を行った。遺構図版は現地で作成した実測図を点検・補正して第2原図を作成し、トレースを行った。図版中のスクリーントーンは次頁の凡例のとおりである。

図版の縮尺は、遺物は土器拓影・剥片石器が2分の1、礫石器が3分の1、遺構は40分の1を原則とした。

写真図版は、遺構については縮尺不定である。遺物については、図版の縮尺と概ね等しい。遺物番号は土器、石器ともそれぞれ1番から付し、図版・写真図版とも同一である。



掲載図版凡例

参考・引用文献

石　野　公　一（1972）:「北上山系開発地域土地分類基本調査（一戸）」岩手県

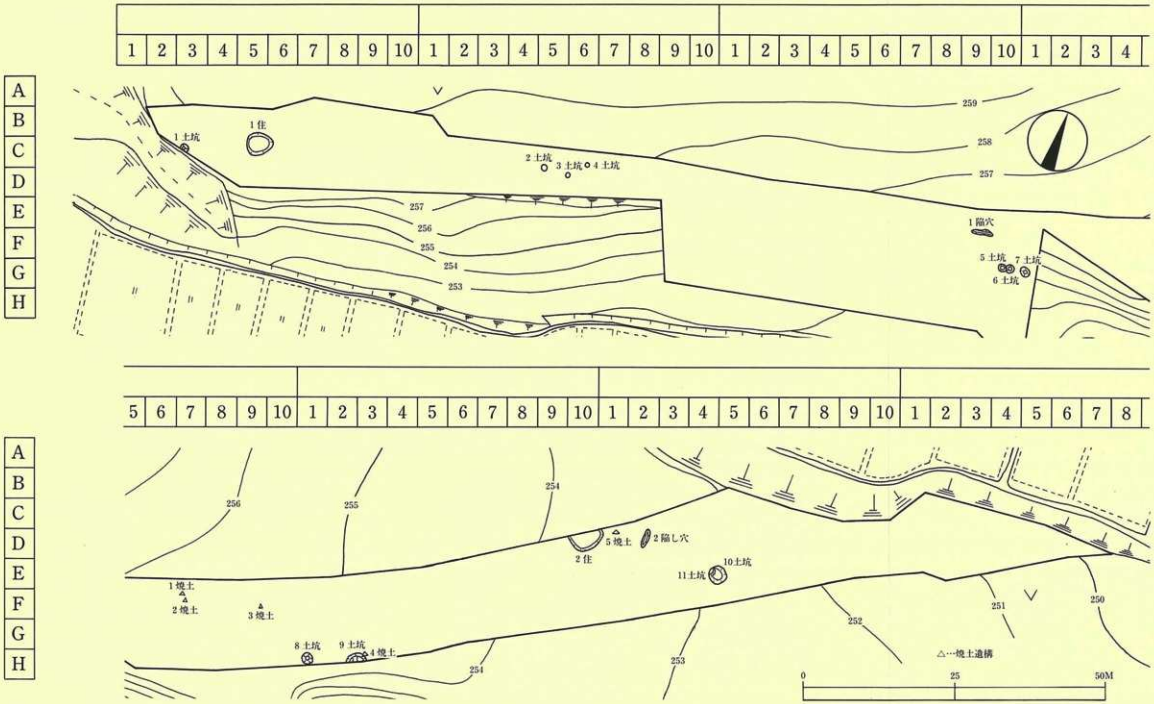
軽米町誌編纂委員会（1975）:「軽米町誌」軽米町

岩手県教育委員会（1972）:「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」

軽米町史編纂委員会（1987）:「軽米町史」軽米町

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1987）:「大堤Ⅱ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 119 集

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1988）:「皂角子久保Ⅵ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 129 集


1 土坑
1 住
2 土坑
3 土坑
4 土坑
259
258
257
256
255
254
253
1 隠穴
5 土坑
6 土坑
7 土坑
1 焼土
2 焼土
3 焼土
8 土坑
9 土坑
4 焼土
5 焼土
2 隠し穴
2 住
10 土坑
11 土坑
252
251
250
△…焼土遺構
0
25
50M

第５図　遺構配置図

Ⅳ. 検出された遺構と遺物

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡1棟・土坑9基・陥し穴状遺構2基、奈良時代の竪穴住居跡1棟・土坑1基、時代を特定できない土坑1基・焼土5カ所が検出された。出土した遺物は土器・石器であり、土器は殆ど細片であるが、縄文時代早期のものと奈良時代の土師器が主体をなし、その総量は小コンテナ2箱である。

1. 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡

遺構（第6図、写真図版3）

調査区の西端、Ⅰ区C5グリッドに位置する。Ⅲ層下面からⅣ層上面で検出した。

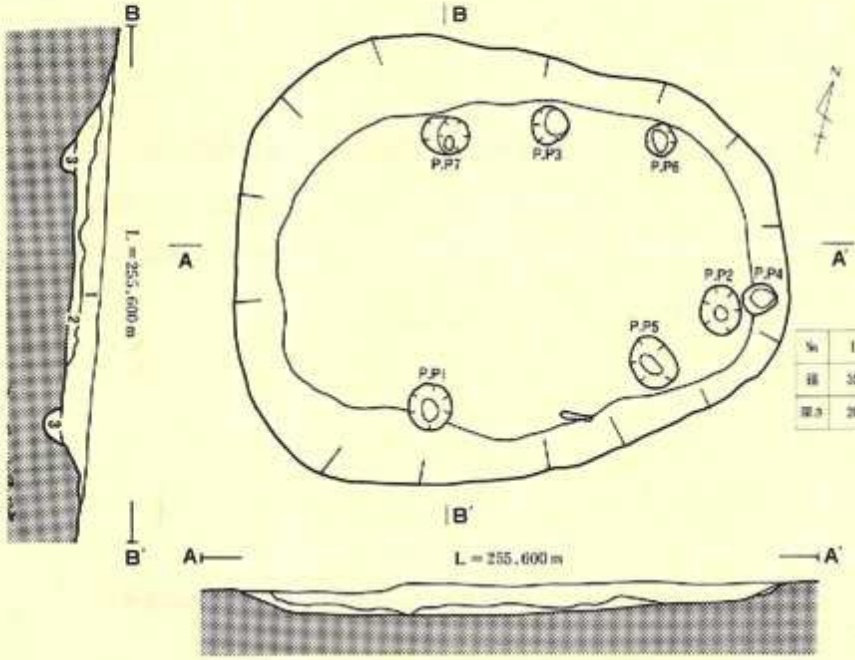
平面形は、長軸方向N－86°－Eの不整楕円形で、長軸425㎝、短軸267～344㎝の規模である。床面積はおよそ7.8㎡である。

壁は床面から20～30°の緩い角度で立ち上がり、壁高は北壁で24㎝、南壁で23㎝、東壁で15㎝、西26㎝を測る。

埋土は黒褐色土を主体として構成され、全体に南部浮石粒を混入するが、上位ほど黒色が卓越する。地山を直接床面とし、地山の斜面にしたがい僅かに南に傾いており、比高最大値は11㎝である。床は全体に柔らかいが、中央部の30×40㎝の範囲に特に堅い粘土質土が分布している。柱穴は7個確認されたが、深さ11～21㎝と平面規模に比して浅く、全て壁際に位置している。柱穴の埋土は全て単層で南部浮石粒を混入する暗褐色土である。炉は検出されなかった。

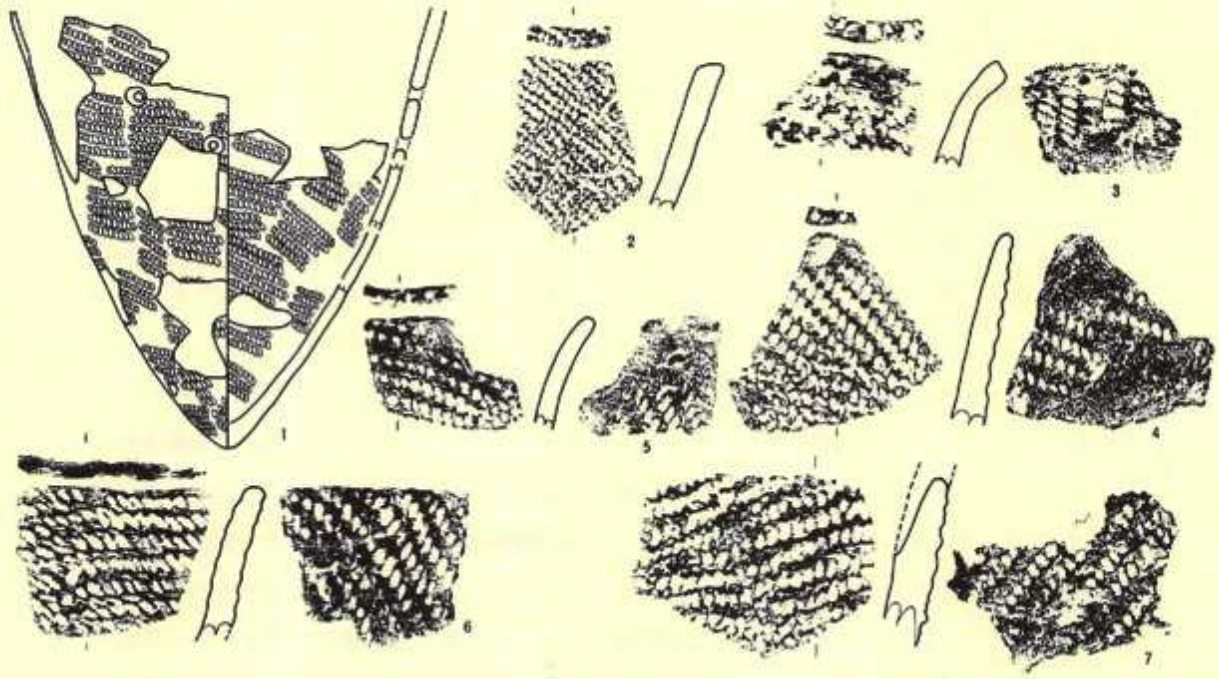
遺物（第6・7図、写真図版9）

〈土器〉 1～4、6～9が床面から、5と10、11が埋土から出土している。10、11を除き全て単節の表裏縄文である。1は竪穴住居跡北西の埋土から小さい破片が多数出土し、それを接合したもので、文様帯の有無は不明である。2～6は口縁部破片であるが、胎土・色調・縄文施文の方法などからそれぞれ1とは別個体であると思われる。文様帯をもつものは3の1点だけで、他の4点は文様帯をもたない。3は口縁端部直下に地文施文後、横位に縄文の側面圧痕を2条めぐらしている。2～5は口唇部に縄文が回転され、6には指頭状の圧痕が見られる。口縁部の傾きは一様ではなく、直線的なもの(2)、緩やかに湾曲するもの（4，6）、それよりは大きく湾曲するもの(5)、やや屈曲するもの(3)とがある。9は底部破片であるが、胎土・色調・焼成・厚さとも1に酷似する。これと同一個体をなすとおもわれる胴部細片が10片出土しているが、8以外は割愛した。遺構出土した表裏縄文土器は少なく見ても7個体であるが、このう



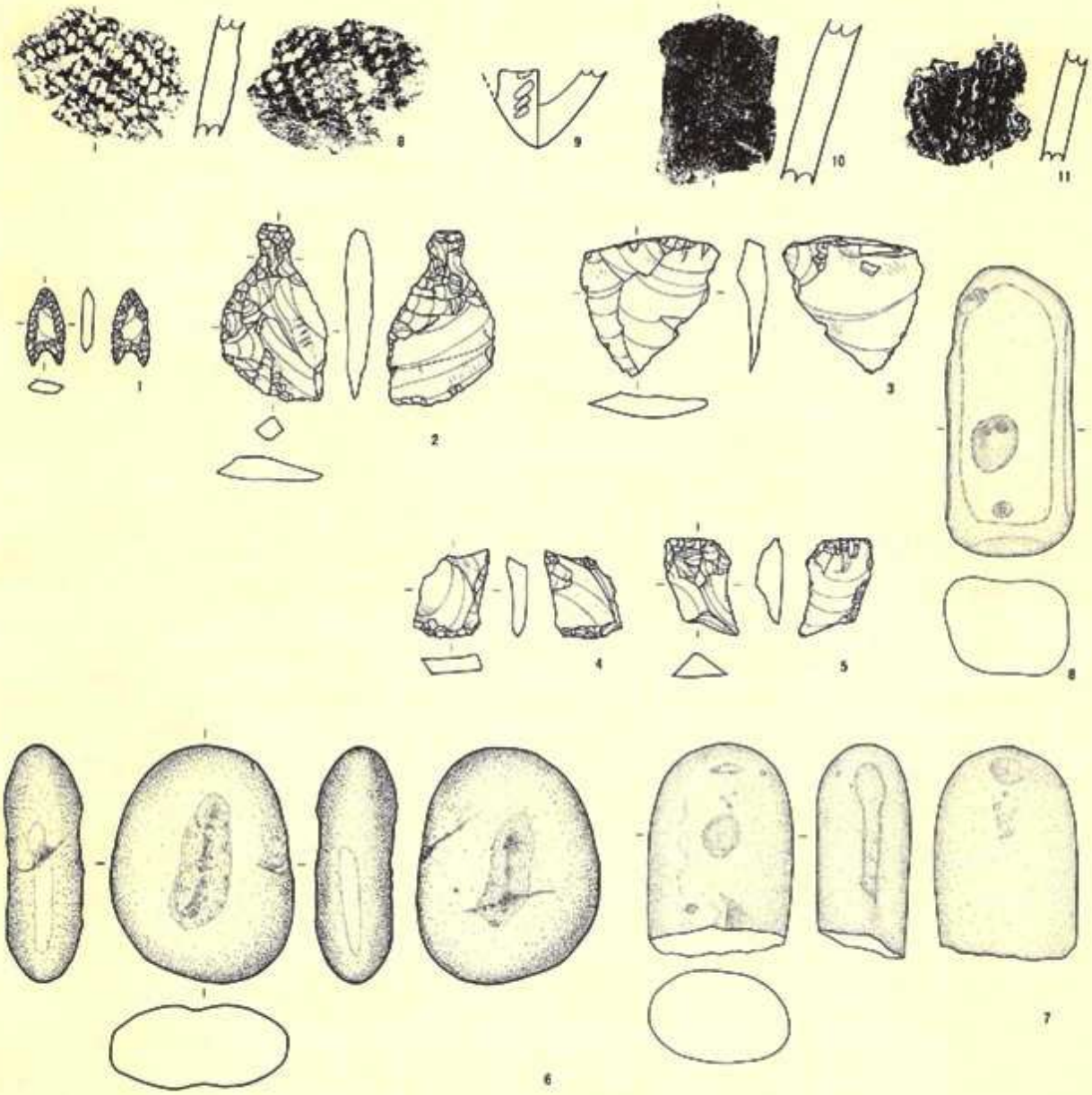
No.	1	2	3	4	5	6	7	
径	35	39	31	22	35	28	28	単位
深さ	20	22	13	15	21	11	12	(cm)

1．10YR2/2黒褐色，シルト質
南部浮石中粒を微量含む。しまりあり。
2．10YR4/4褐色土と10YR2/3黒褐色土の
混土。南部浮石中粒を少量含む。



番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴	胎土	分類	写真図版
1	1号竪穴、埋土	深鉢	口縁部突起	単軸表裏縄文、補修孔有		1－d	9
2	1号竪穴、埋土	深鉢	口縁部	単軸表裏縄文、口唇部縄文圧痕	粗砂、長石含	1－d	9
3	1号竪穴、埋土	深鉢	口縁部	単軸表裏縄文、口唇部縄文圧痕	粗砂少量含	1－d	9
4	1号竪穴、埋土	深鉢	口縁部	単軸表裏縄文、口唇部縄文圧痕	浮石粒含	1－d	9
5	1号竪穴、埋土	深鉢	口縁部	単軸表裏縄文、口唇部縄文圧痕	雲母含	1－d	9
6	1号竪穴、埋土	深鉢	口縁部	単軸表裏縄文、口唇部沈線圧痕	石英含	1－d	9
7	1号竪穴、埋土	深鉢	胴部	単軸表裏縄文	雲、粗砂含	1－d	9

第6図　第1号竪穴住居跡・出土遺物



番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴	胎土	分類	写真図版
8	1号住居、床面	深鉢	胴部	平面表面縄文	雲母少含	Ⅱ－d	9
9	1号住居、床面	深鉢	底部	平面縄文		Ⅱ－e	9
10	1号住居、埋土	深鉢	胴下半部	無文	雲母少量含	Ⅱ－f	9
11	1号住居、埋土	深鉢	胴部	沿線無節斜縄文	雲母、礫含	Ⅱ－a	9

番号	出土地点・層位	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	写真図版
1	1号住居、床面	石鏃	2.4	1.1	0.4	0.6	珪質頁岩(黒)	9
2	1号住居、床面	石鏃	3.6	3.3	0.7	9.15	珪質頁岩(緑灰色)	9
3	1号住居、床面	不定形石器	3.9	4.0	0.8	8.6	珪質頁岩(緑灰色)	9
4	1号住居、床面	・	2.2	1.9	0.5	2.75	珪質頁岩(黒)	9
5	1号住居、床面	・	2.0	1.9	0.6	3.15	珪質頁岩(緑灰色)	9
6	1号住居、床面	磨石	12.4	7.8	2.6	420	変質安山	9
7	1号住居、床面	磨石	8.7	6.2	3.0	260	変質安山	9
8	1号住居、床面	磨石	12.4	5.5	4.7	540	変質安山	9

第7図　第1号竪穴住居跡出土遺物

ちＲＬの単節縄文が５個体、ＬＲが２個体である。

〈石器〉 図示した８点の他、埋土からフレークが４点出土している。１は縁辺部のみが調整され、中央部は剥離面を残している。２は二辺は明らかに両側から刃部を形成しているが、一辺は片側のみに剥離がみられ、これは使用痕の可能性がある。３は刃部を作り出してはいないが、一つの辺に使用痕がみられる。４は両刃であり切断具と思われるが、刃部からみて破損していることが分かる。５は片刃であるが、刃の反対側にも使用痕が残る。やはり破損している。６の凹石は、両面それぞれ３カ所以上に使用痕が認められる。また、両側面に擦痕がみられ磨石としても使用されている。７は３面に敲打痕がみられ、使用中または使用後に折損したものである。８は１面に擦痕が認められる。

時期 床面からの出土土器から、早期末葉の住居跡と思われる。

第２号竪穴住居跡

遺構（第８図、写真図版４）

調査区の東側Ⅴ区Ｄ 10 グリッドに位置し、第２号陥し穴状遺構の西７ｍの地点にある。Ⅰ・Ⅱ層を除去した段階で、十和田ａ降下火山灰が環状に分布したことにより検出された。遺構の大半は北側の調査区域外にのびており、全容は不明である。調査した南半分からの推定では、平面形は隅丸方形と思われる。規模は東西 475 ㎝、南北 265 ㎝以上、調査範囲内の床面積は 10.1 ㎡である。

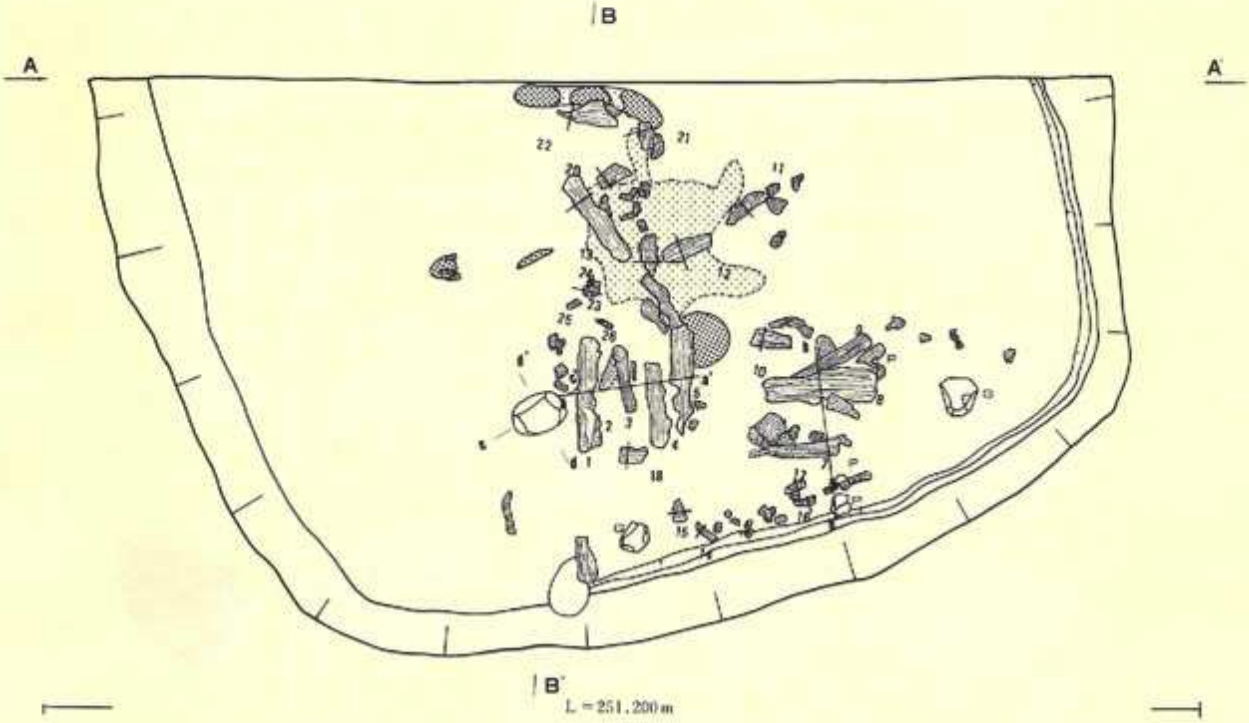
埋土は２種の火山灰を含む７層で構成され、上位に白頭山火山灰、中位に十和田ａ降下火山灰がレンズ状に堆積している（鑑定結果に基づく）。下位は南部浮石粒を含むしまりのない黒色ないしは黒褐色土である。床面あるいはその直上に炭化材や焼土が分布していることから、この住居跡は焼失住居跡と思われる。

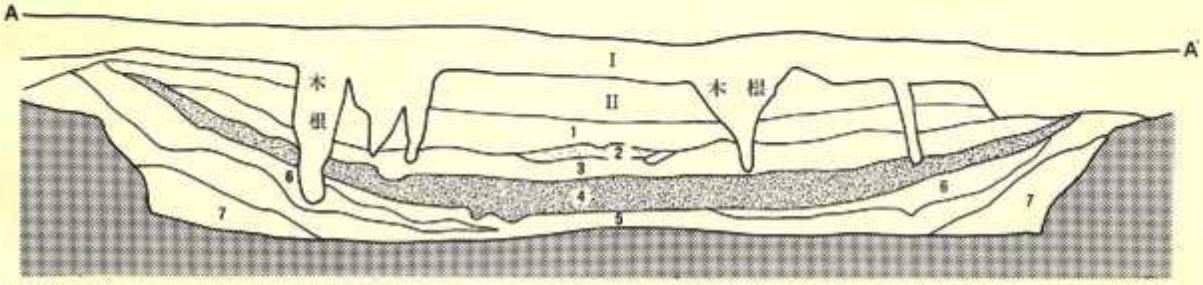
東および西壁はやや外傾気味に、南壁は垂直気味に立ち上がる。壁高は南 52 ㎝、東 55 ㎝、西 52 ㎝である。

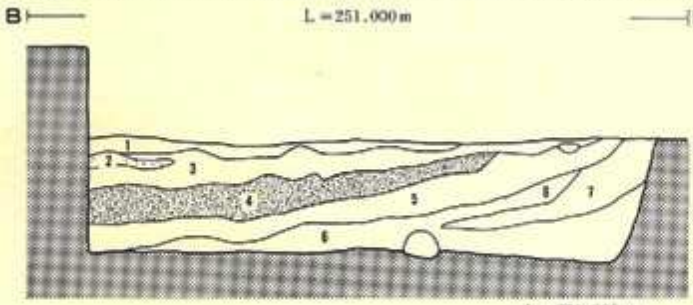
床面は平坦で、貼り床はなく、Ⅳ層起源の混土で全体的に軟質である。部分的ではあるが、壁際に浅黄色～灰白色の粘土が薄くブロック状に分布しているのが確認された。周溝は、幅 10 ㎝深さ４～５㎝程度のものが東側に巡る。柱穴は確認できなかった。

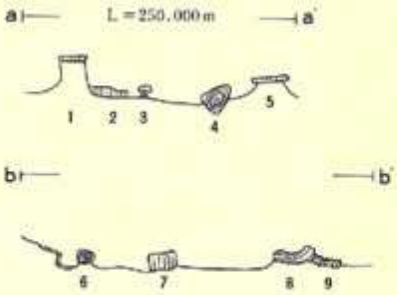
カマドは調査した範囲には存在せず、北側の調査区域外にあると思われる。

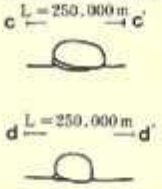
炭化材は、東側と西側には細片が分布し、南側中央部には南北方向とそれに直交する方向に分布する。炭化材の断面から、明らかに丸木材と言えるのは４・６・16、丸木材または割り材と思われるものは８・９・10・23 である。それ以外は板材または角材の様相を示しているが、残存状況が良くないため断定はできない。炭化材の樹種は、６・16・17 はマツまたはス











1．10YR2/1黒色　南部浮石小粒を極微量含む。
2．10RY5/6黄褐色　白頭山火山灰。粘性に乏しい。
3．10YR4/1褐灰色　1層と4層の混土。しまりなし。
4．10YR5/3にぶい黄褐色　十和田a降下火山灰。
5．7.5YR1.7/1黒色　南部浮石小粒を極微量含む。
6．7.5YR2/1黒色　5層より南部浮石の混入多い。
7．7.5YR1.7/1黒色　南部浮石、5、6層より少ない。

2.5YR7/4～7/8淡黄～黄色　粘土

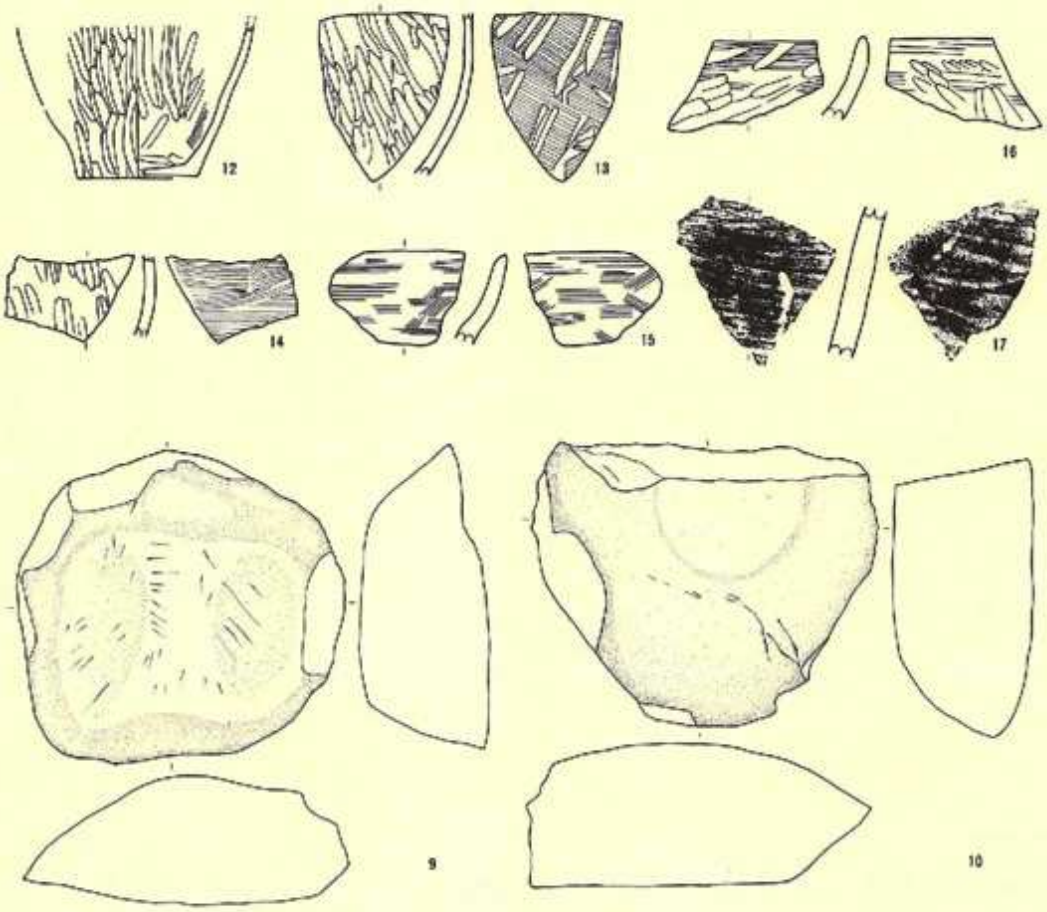
24 25 26　1～5、7～15、18～26　クリ
6、16、17　針葉樹

第8図　第2号竪穴住居跡・出土遺物

ギの針葉樹、それ以外は全てクリである。

木性の炭化材の下およびその周囲から草性の炭化物も検出された。これはススキが炭化したものと鑑定された。

焼土は全て炭化材の下から検出され、厚さは3㎝以内と極めて薄い。灰が焼土の中または下に混入しており、これは住居焼失時に形成されたものと思われる。



番号	出土地点	器種	胎土	成形	調整 外面	調整 内面	分類	写真図版
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]		[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

番号	出土地点	器種	胎土	文様の特徴	的上	分類	写真図版
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

番号	出土地点・層位	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	特徴・備考	写真図版
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]

第9図　第2号竪穴住居跡・出土遺物

遺物（第９図、写真図版10）

〈土器〉 遺構からの出土数は僅か７片と少ない。埋土から縄文土器が１片出土しているが、他は全て床直上から出土したロクロ未使用の土師器片である。土師器は、胎土に粗砂・礫・沼鉄を含み、焼成はいずれも良好で、緻密である。15を除き器表面はヘラミガキの跡が明瞭に残っている。12は炭化材の下から出土したものであるが、赤褐色の光沢をもつほど丁寧に磨かれている。13、14は球胴甕に近い器形と思われる。15、16は共に段を持つ坏の口縁部である。

〈石器〉 ９は南側の壁に寄った床直上から出土した。石質はきめが粗くザラついている。４方向に線条痕が認められ砥石と思われるが、長期に亘って使用されたものではなさそうである。10は南東に寄った床面からの出土である。上面中央部に光沢のある滑らかな部分があり、擦痕とみられる。その裏面に焼成を受けた跡がある。使用目的は不明である。

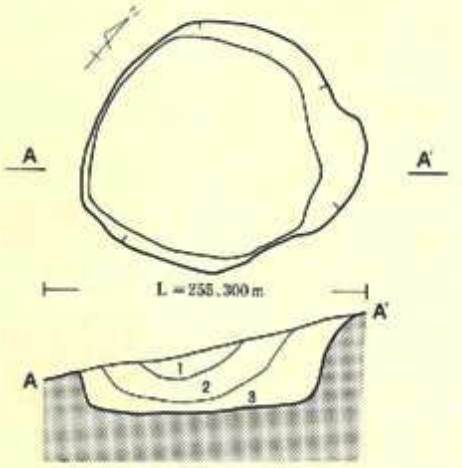
〈粘土塊〉 南西よりの床面から出土した。床と接する部分には同じ粘土で粘土塊を据え置くようにつくられているのが観察された。角のとれた直方体形でその法量は、縦18×横24×高さ14㎝、重さ５㎏である。

時期 床面から奈良時代の土師器が出土していることから、本遺構は奈良時代の住居跡と思われる。

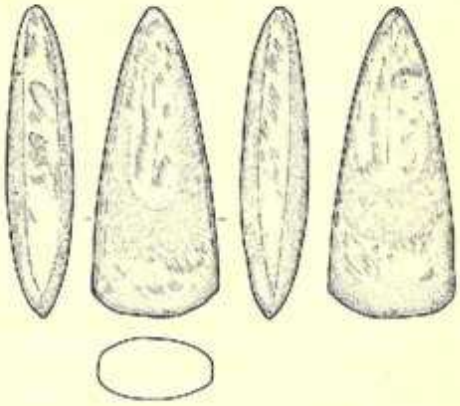
２．土　坑

第１号土坑（第10図、写真図版５）

調査区最西端Ⅰ区Ｃ３グリッド、西側に下がる斜面の崖縁に位置する。Ⅳ層上面で検出した



1．10YR1.7/1黒色　海部浮石中粒を微量含む。しまりあり。
2．10YR2/1黒色　海部浮石極大粒を少量含む。しまりなし。
3．10YR2/1～2/2黒色～黒褐色　底部浮石大粒を少量含む。



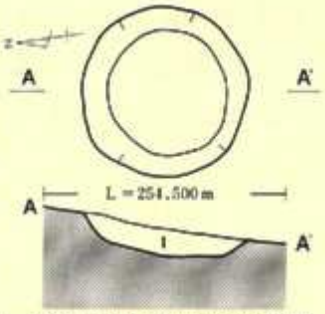
番号	出土地点・層位	器種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	特徴・備考	写真図版
11	1号土坑　埋土	砥石状	13.2	5.4	2.8	200	凝灰質砂岩		13

第10図　第１号土坑・出土遺物

遺構の上部は耕作により削平を受けていると思われる。平面形は不整円形、断面形は箱状である。規模は、開口部径で 150 × 170 cm、底部径 132 × 135 cm、深さ 45 cmである。底面は平坦で、壁は垂直に近い角度で立ち上がるが東側で外傾する。これは、斜面上方が崩落した結果と思われる。埋土は 3 層で構成され、黒色土が主体であるが下位ほど南部浮石粒の混入が多い。副穴等は認められない。

遺物（第10図、写真図版10）

〈石器〉 土坑の中央部、埋土の 2 層下位から出土した。敲打・整形・研磨によってつくられた両刃の縦斧で、刃部には使用痕がみられる。基部と刃先から約 3 cmまでの所が、入念に磨かれている。



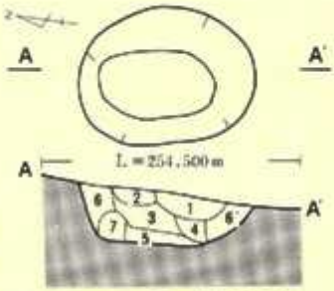
1．10YR1.7/1黒色　南部浮石大粒少量含む。

第11図　第 2 土坑

第 2 号土坑（第11図、写真図版 5）

調査区西寄りの緩い斜面のⅡ区C 5 グリッドに位置する。表土直下のⅣ層上面で検出した。遺構の上部は耕作により削平を受けていると思われる。平面形は円形、断面形は皿状である。規模は、開口部径 99 × 101 cm、底部径 70 × 73 cm、深さ 10 cmである。底面は斜面に沿って緩い傾斜をなし、壁は外傾気味に緩やかに立ち上がる。埋土は南部浮石粒を混入する黒色土による単層である。副穴等は認められない。

遺物は出土していない。



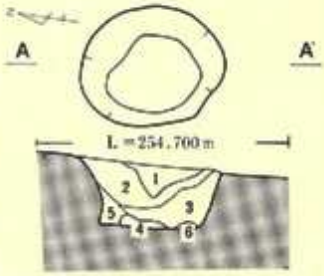
1．7.5YR1.7/1～2/1黒色　南部浮石少量含む。
2．7.5YR2/2黒褐色　南部浮石大粒多量含む。
3．10YR2/3黒褐色　南部浮石大粒極多量含む。
4．7.5YR4/4褐色　南部浮石大粒少量含む。
5．7.5YR5/8明褐色軽石主体、暗褐色土混入。

第12図　第 3 土坑

第 3 号土坑（第 12 図、写真図版 5）

調査区西寄りのⅡ区C 6 グリッドに位置し、第 2 号土坑の東 4 mの地点にある。Ⅳ層上面で検出した。遺構の上部は耕作により削平を受けていると思われる。平面部径 87 × 113 cm、底部径 44 × 75 cm、深さ 34 cmである。底面は平坦で、壁は外傾気味に立ち上がる。埋土は、全体に南部浮石粒を多量に混入し、堅くしまった黒色～褐色土によって構成される。人為的な埋め戻しによるものと思われる。副穴等は認められない。

遺物は出土していない。



1．7.5YR2/1黒色　南部浮石極大粒多量含む。
2．7.5YR2/2黒褐色　南部浮石大粒多量含む。
3．7.5YR5/6明褐色　軽石主体、黒色土混入。
4．7.5YR3/3暗褐色　南部浮石極大粒多量含む。
5．7.5YR4/6褐色　南部浮石極大粒多量含む。
6．7.5YR3/3～3/4黒褐色～暗褐色　南部浮石大粒を多量含む。しまりあり。
6．6層より南部浮石粒の混入多い。
7．7.5YR5/8明褐色　しまりあり。

第13図　第 4 土坑

第４号土坑（第13図、写真図版５）

調査区西寄りのⅡ区Ｃ６グリッドに位置し、第３号土坑の北東４ｍの地点にある。Ⅳ層上面で検出した。遺構の上部は耕作により削平を受けていると思われる。平面形は不整円形、断面形は箱状である。規模は、開口部で77×94㎝、底部で50×60㎝、深さ43㎝である。底面は平坦で、壁はほぼ垂直気味に立ち上がる。埋土は５層から構成される。全体に南部浮石粒が混入するが、上位から黒色、褐色、明褐色と変化する。地山の崩落の後、黒色土が自然堆積したものと思われる。副穴等は認められない。

遺物は出土していない。

第５号土坑（第14図、写真図版６）

調査区中央部の急斜面、Ⅲ区Ｆ10グリッドに位置する。表土直下のⅣ層上面で検出した。遺構は斜面上に構築されている。第６号土坑と開口部東壁で重複する。平面形は円形、断面形はビーカー状である。規模は、開口部径129×130㎝、底部径80×94㎝、深さ102㎝である。底面は中央部がやや窪み壁際が高く比高16㎝であるが、湧水のため明確でない部分がある。壁は斜面上方は直立、下方はやや外傾する。遺構確認が十分でなかったため、上・中位置の埋土は不明であるが、最下層は明黄褐色の粘土質であり、南部浮石起源のものと思われる。第６号土坑との新旧関係については、本土坑の埋土の方が幾分黒く、円形をなすことから、本土坑のほうが新しいと考えたが、同時存在の可能性もある。副穴等の施設は湧水のため確認できなかった。

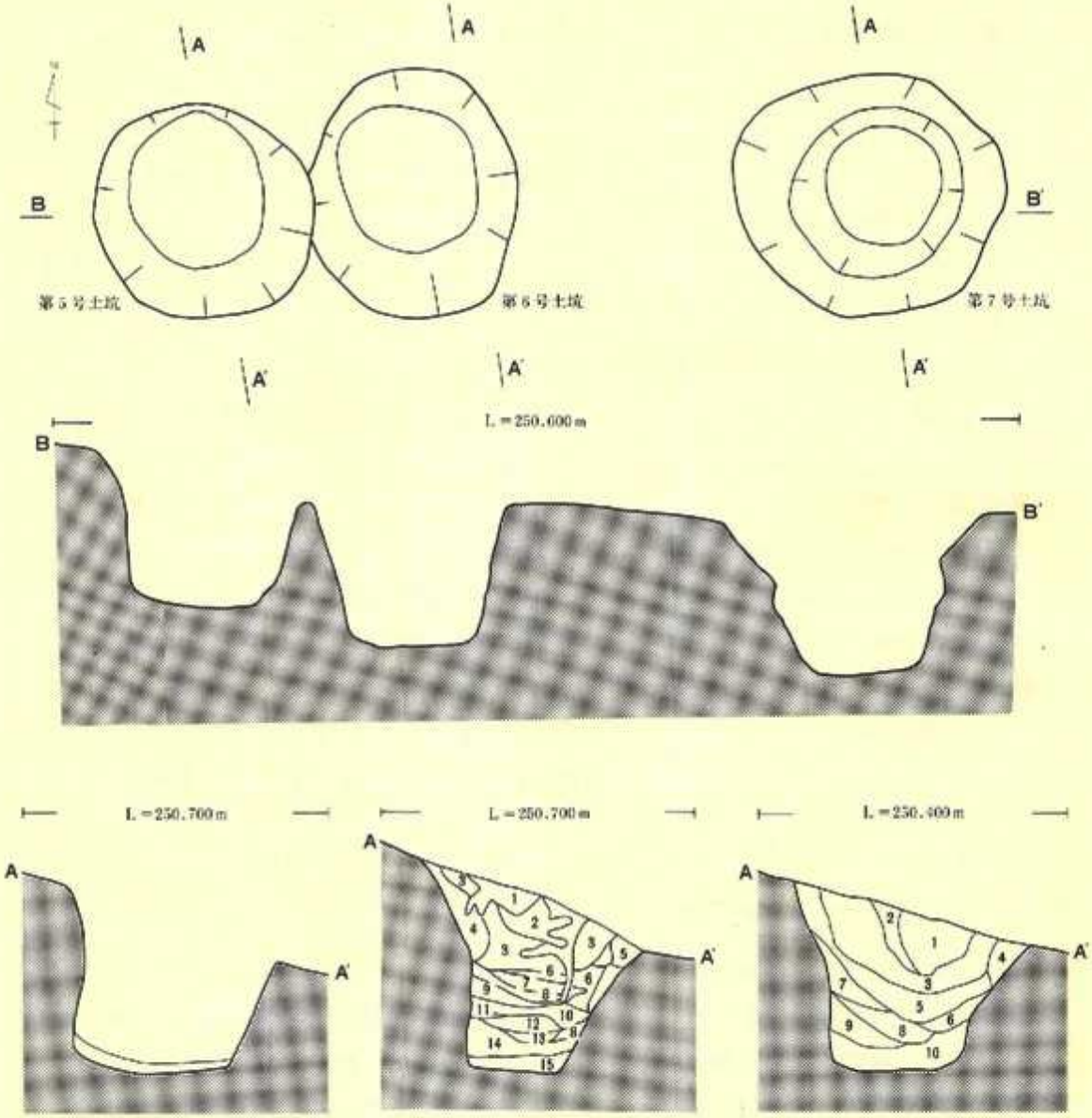
遺物は出土していない。

第６号土坑（第14図、写真図版６）

調査区中央部のⅢ区Ｆ10グリッドに位置し、第５号土坑と西壁の一部で重複する。Ⅳ層上面で検出した。遺構は斜面上に構築されている。平面形は楕円形、断面形はビーカー状である。規模は開口部で126×149㎝、底部で79×93㎝、深さ115㎝である。底面は平坦で湧水があり、軟質である。壁は中位までは直立し、開口部に向かって外傾する。埋土は15層で構成される。上位には木根による攪乱がみられるが、崩落土である南部浮石と、黒褐色土・暗褐色土・砂が互層を形成し、自然堆積の様相を呈する。副穴等の施設は湧水のため確認できなかった。遺物は出土していない。

第７号土坑（第14図、写真図版６）

調査区中央部のⅣ区Ｇ１グリッドに位置し、第６号土坑の南西2.5ｍの地点にある。Ⅳ層上



1．10YR7/6～6/6　明黄褐色　粘性あり。

1．7.5YR2/2黒褐色　南部浮石中粒を少量含む。
2．10YR3/2黒褐色　南部浮石大粒を少量含む。
3．7.5YR3/3暗褐色　南部浮石中粒を少量含む。
4．10YR4/6褐色　砂質。
5．10YR2/1黒色　南部浮石中粒を微量含む。
6．10YR5/6黄褐色　砂質　南部浮石を微量含む。
7．10YR3/3～4/4暗褐色～褐色　南部浮石多量含む。
8．10YR6/8明黄褐色　南部浮石主体。
9．10YR2/3暗褐色　上部に南部浮石細小粒を含む。
10．10YR2/2黒褐色　砂質
11．10YR6/6明黄褐色　南部浮石主体。
12．10YR3/3暗褐色　砂質
13．10YR4/4褐色　砂質
14．10YR4/6明黄褐色　粘性あり。
15．10YR5/4にぶい黄褐色　砂を含む。粘性あり。

1．7.5YR1.7/1黒色　南部浮石極大粒を少量含む。
2．7.5YR2/1黒色　南部浮石大粒を微量含む。
3．7.5YR2/3暗褐色　南部浮石大粒を少量含む。
4．10YR2/3黒褐色　南部浮石中粒を少量含む。
5．7.5YR3/3暗褐色　南部浮石大粒を多量含む。
6．7.5YR3/3暗褐色　南部浮石と砂を含む。
7．7.5YR3/4暗褐色　南部浮石と砂を含む。
8．7.5YR3/2黒褐色　南部浮石小粒を微量含む。
9．10YR5/8黄褐色　南部浮石主体。褐色土が混入。
10．10YR5/8黄褐色　南部浮石主体。粘土を含む。

第14図　第5号、6号、7号土坑

面で検出した。遺構は斜面上に構築されている。平面形は円形、断面形はビーカー状である。規模は、開口部径 143 × 160 ㎝、底部径 70 × 70 ㎝、深さ 100 ㎝である。底面は平坦で湧水があり、軟質である。壁は底面から中位までほぼ垂直に立ち上がり、開口部に向かって外傾する。埋土は 10 層で構成される。黒色～黒褐色を主体とした自然堆積の様相を呈し、中位に崩壊土である南部浮石を含む。副穴等の施設は湧水のため確認できなかった。

遺物は出土していない。

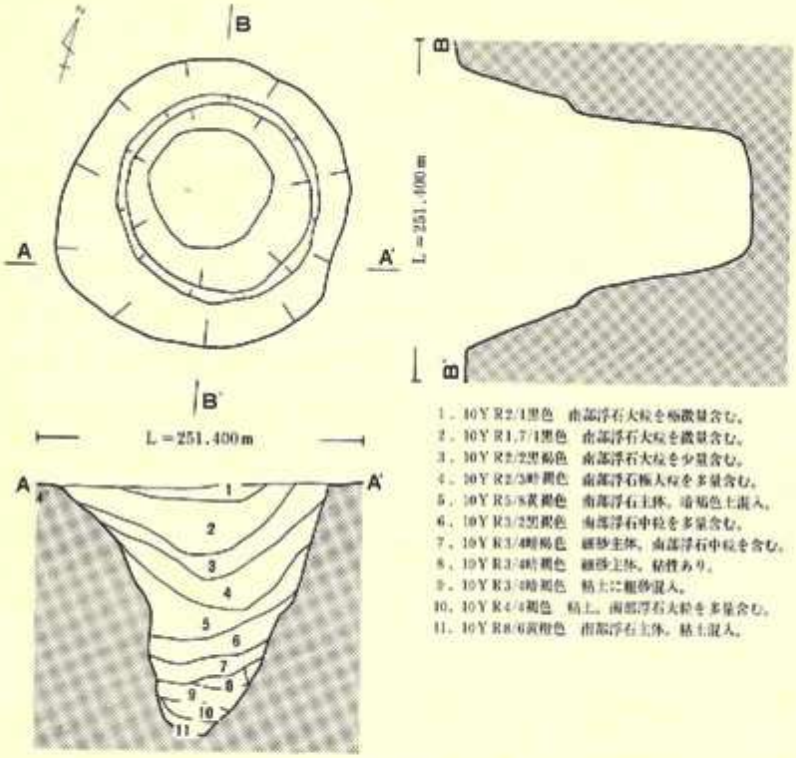
第 8 号土坑（第15図、写真図版 6 ）

調査区中央部の平坦地Ⅴ区Ｇ１グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形、断面形は中位に段を持つビーカー状である。規模は、開口部で 157 × 180 ㎝、底部で 49 × 52 ㎝、深さ 168 ㎝である。底面は平坦である。常時湧水が下半を覆うため、副穴等の施設の有無を確認できなかった。埋土は 11 層で構成される。上位は黒色～黒褐色土、中位に南部浮石の崩落土、下位に暗褐色～褐色土であり、自然堆積の様相を示している。

遺物は出土していない。

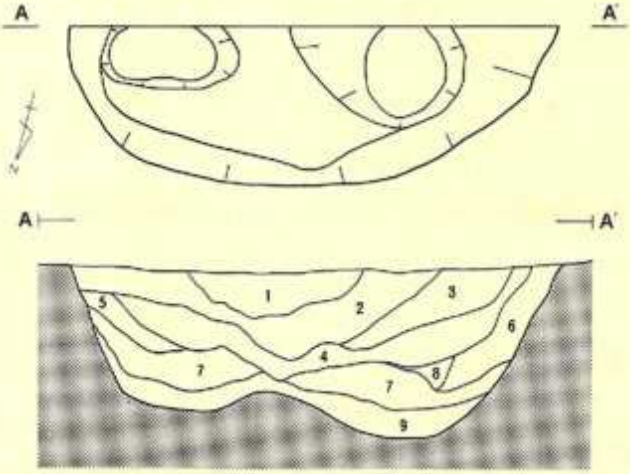
第 9 号土坑（第16図、写真図版 6 ）

調査区中央部の平坦地Ⅴ区Ｇ２グリッドに位置し、第 8 号土坑の西 8 ｍの地点にある。Ⅲ層



第15図　第 8 号土坑

上面で、十和田ａ降下火山灰がブロック状に散在していたことから検出された。南側が調査区域外に延びているため詳細は不明である。調査した範囲内からの推定では、平面形は円形または楕円形はおおむねＵ字状であるが、底面の中央部がやや盛り上がっている。規模は、開口部88 cm×263 cm、底部径60 cm×190 cm、深さ94 cmである。底面はⅣ層中にあり、固くしまっているが凹凸が激しい。底面の東と西に窪みがあり、深さはそれぞれ11 cm、28 cmである。埋土は、上位はしまりなく、下位は堅くしまる。４層は十和田ａ降下火山灰がブロック状に混入した黒色土である。



1．7.5Y R2/1～2/2黒色～黒褐色　シルト質。しまりなし。
2．10Y R2/2黒色～黒褐色　シルト質。南部浮石中粒を微量含む。1層よりしまりあり。
3．10Y R2/1～2/2黒色～黒褐色　シルト質。南部浮石中粒を微量含む。しまりあり。
4．10Y R1.7/1黒色　十和田ａ降下火山灰をブロック状に含む。しまりあり。
5．10Y R1.7/1黒色　シルト質。4層よりはしまりなし。
6．10Y R2/3黒褐色　シルト質　南部浮石中粒を下位に微量含む。しまりなし。
7．10Y R3/4暗褐色　シルト質。南部浮石中粒を少量含む。固くしまっている。
8．10Y R2/2黒褐色　シルト質。上位ほど黒味を帯びる。
9．10Y R6/8 明黄褐色　南部浮石主体。褐色土混入。固くしまる。

第16図　第９号土坑

遺物は出土していない。

第10号土坑

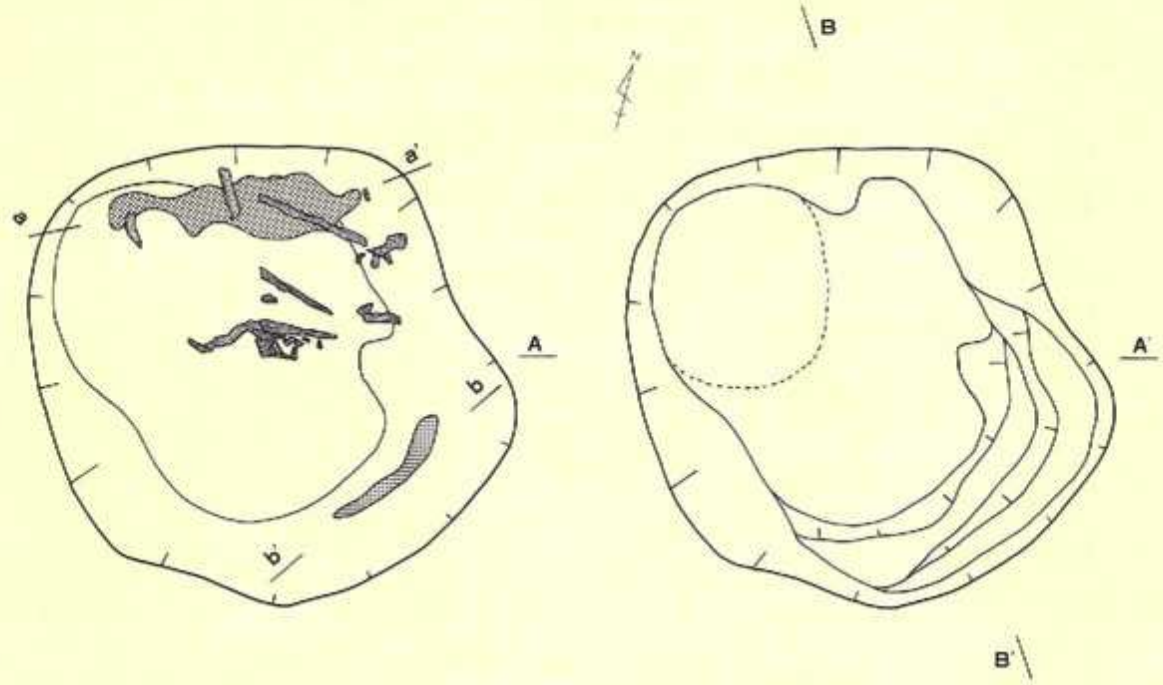
（第17図、写真図版７）

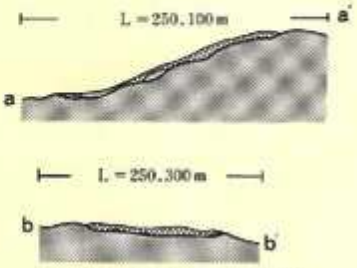
調査区東側の平坦地Ⅵ区Ｅ４グリッドに位置し、第２号竪穴式住居跡の東19 m、第２号陥し穴状遺構の東12 mの地点にある。検出面はⅢ層上面で、十和田ａ降下火山灰（鑑定結果に基づく）が円形に広がり、その外側に黒色～黒褐色土が同心円状をなして分布している。

第11号土坑と重複関係にある。本土坑は第11号土坑の埋土を底面の一部としており、本土坑の方が新しい。

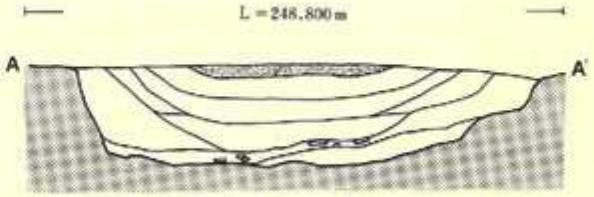
平面形は隅丸方形状の不整形、規模は開口部径240 × 290 cm、底部径155 × 215 cm、深さ58 cmである。底面は凹凸が激しく、堅くしまっている。壁は南西方向で底面から階段状に、他は垂直気味に立ち上がる。

埋土は７層で構成される。黒色～黒褐色土が主体で南部浮石を含み、最下層はⅣ層起源の混土である。６層に炭化材が多量に混入しているが、その分布は北側半分に集中している。炭化材の下には焼土が形成され、その近辺には灰の分布が見られる。焼土は厚さ４cm、北側の壁と





1．7.5YR5/8明褐色　地土。しまりなし。
2．5YR1.7/1黒色　灰を含む。しまりなし。



1．10YR5/3～6/2にぶい黄褐色～灰黄褐色　十和田a降下火山灰層。固くしまっている。
2．10YR1.7/1黒色　十和田a降下火山灰を極微量含む。南部浮石粒を極微量含む。しまりなし。
3．10YR2/1～2/2黒色～黒褐色　十和田a降下火山灰を微量含む。南部浮石中粒を少量含む。しまりなし。
4．10YR2/1黒色　十和田a降下火山灰を微量含む。南部浮石3層よりやや多い。しまりなし。
5．10YR2/2黒褐色　南部浮石極大粒を少量含む。しまりなし。
5'．10YR1.7/1～2/2黒色～黒褐色　南部浮石極大粒を少量含む。しまりなし。
6．10YR1.7/1黒色　炭化物を含む。南部浮石大粒を少量含む。しまりなし。
7．10YR4/4褐色　南部浮石極大粒を多量に含む。しまりあり。

番号	出土地点	器種	部位	成形	調整		備考	写真図版
					外面	内面		
18	10号土坑、床面	壺	口縁部	ロクロ水挽成	ヨコナデ	ヨコナデの後ハケ目		10

第17図　第10号土坑

南側の壁に、土坑の底面に向かって内傾するように形成されている。

炭化材は、かなり脆弱化していたが、残存状況のよいものは、断面形から丸木材と思われる。樹種はアオタモ、サクラ、ホオ、クリ、ナラである。

遺物（第17図、写真図版10）

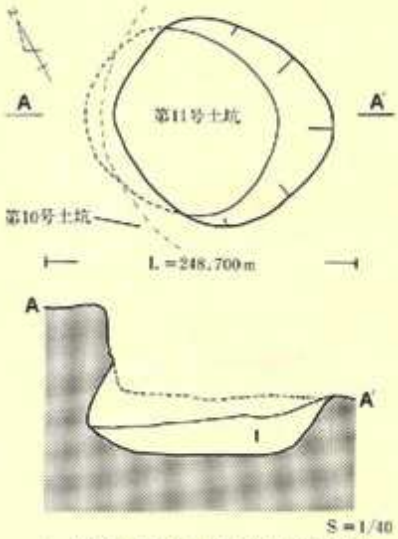
〈土器〉 土師器片が2片出土し、18は接合した土師器片である。埋土第5層の炭化材を含む層より上の層から出土した。口唇部から2㎝程下で「く」の字状に屈曲しており、口縁部が外反する甕の破片と思われる。ロクロ未使用で口唇部は幾分歪んでいる。

第11号土坑（第18図、写真図版7）

調査区東側Ⅵ区E 4グリッドに位置し、第10号土坑の底面を精査する段階で検出した。初め第10号土坑の埋土と識別できず掘りすぎてしまったが、本土坑が埋まった後に第10号土坑が構築されており、本土坑の方が古い。

平面形は円形、断面形は全体に西側に傾斜するU字状である。規模は、開口部で120㎝×123㎝、底部で96×109㎝、深さ30㎝である。埋土は単層で、南部浮石を含む暗褐色土である。底面は軟質で、南部浮石が混入している。壁は西側に約60度内傾し、東は逆にほぼ同じ角度で外傾する。上半部は第10号土坑に切られているので当初の形状は不明であるが、フラスコ状の可能性がある。

遺物は出土していない。



第18図　第11号土坑

3．陥し穴状遺構

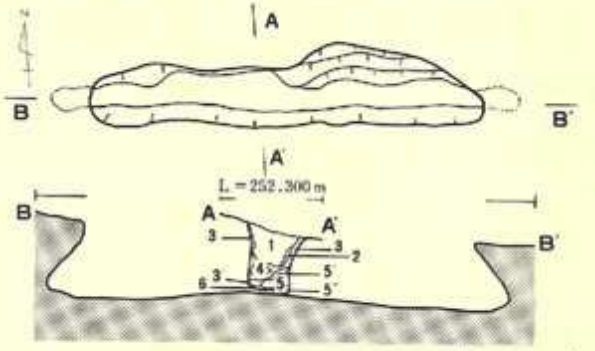
第1号陥し穴状遺構（第19図、写真図版8）

調査区中央部のⅢ区E 9グリッドに位置し、第5号土坑の北西8ｍの地点にある。表面直下のⅣ層上面で検出した。

平面形は、溝状、断面形はU字状である。規模は、開口部70×370㎝、底部30×434㎝、深さ74㎝である。長軸方向はN－85°－Eで、斜面の等高線に対し平行に構築されている。底面は中央部分でやや盛り上がり、両端方向に緩く傾斜している。長軸両端は30㎝ほど抉り込んでいる。

埋土は中位にVI層に相当する崩落土が厚さ5㎝程帯状に堆積し、その下位にIV層に相当する崩落土と黒色土の混土が堆積している。このことから、一旦南部浮石を含む黒色土が埋まった後、東半分の北壁が大きく崩落し、そこにできた窪みにさらに黒褐色土が堆積したものと考えられる。

遺物は出土していない。



1．7.5YR2/2黒褐色　シルト質。南部浮石大粒を少量含む。しまりなし。
2．10YR6/8明黄褐色　南部浮石主体。1層の黒褐色土が混入。
3．10YR4/6褐色　粘土。しまりあり。
3'．10YR4/4褐色　粘土。しまりあり。
4．10YR3/4暗褐色　シルト質。南部浮石中粒を多量含む。しまりあり。
5．7.5YR2/1黒色　シルト質。南部浮石大粒を多量含む。
5'．7.5YR2/1黒色　シルト質。南部浮石大粒を多量含む。
5''．7.5YR2/1黒色　シルト質。南部浮石大粒を少量含む。
6．10YR4/6褐色　粘土質シルト。南部浮石微量含む。

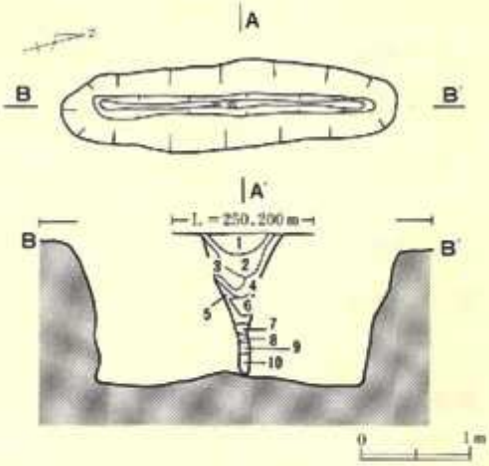
第19図　第1号陥し穴状遺構

第2号陥し穴状遺構（第20図、写真図版8）

調査区東部の平坦地、VI区C2グリッドに位置し、第2号竪穴住居跡の南西5mの地点にある。Ⅲ層上面で検出した。

平面形は溝状、断面形はY字状である。規模は、開口部78×310㎝、底部10×247㎝、深さ130㎝である。長軸方向はN－14°－Eで、等高線に対し平行に構築されている。床は中央部分が狭くやや盛り上がり両端方向に緩い傾斜をなして僅かに広がる。側壁は、中位で内側に張り出して最も狭くなり、開口部に向かって緩やかに外傾して広くなる。埋土は南部浮石を含む黒褐色土を主体とするが、下位にはIV層の崩落土の下に黒色の砂質シルトが堆積している。

遺物は出土していない。



1．7.5YR1.7/1黒色　シルト質。しまりなし。
2．7.5YR2/1黒色　シルト質。黒褐色土がブロック状に混入。
3．7.5YR2/2黒褐色　シルト質。南部浮石中粒を微量含む。
4．7.5YR3/2黒褐色　シルト質。褐色砂質土がブロック状に混入。
5．10YR5/6黄褐色　南部浮石主体。暗褐色土が混入。
6．10YR2/3黒褐色　砂質シルト。固くしまる。
7．10YR1.7/1黒色　シルト質。灰黄褐色砂が多量に混入。
8．10YR5/8黄褐色　南部浮石を主体として、7層が混入。
9．10YR1.7/1黒色　砂質シルト。
10．10YR4/6褐色　粘土質シルト。黒褐色土混入。

第20図　第2号陥し穴状遺構

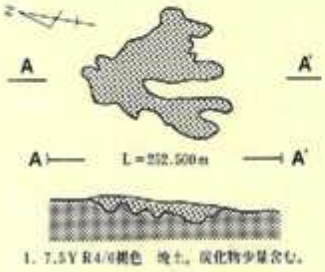
4．焼　土

焼土はいずれもⅢ層上面で検出され、黒褐色砂質シルトが焼成を受けて形成されたものでしまりがなく脆い。どの焼土からも遺物は出土していな

い。

第１号焼土（第21図、写真図版８）

調査区中央部の平坦地、Ⅳ区Ｅ７グリッドに位置する。平面形は不整形で70×80㎝の楕円形状の範囲に広がり、厚さは最大で12㎝、全体では８㎝ほどである。



第21図　第１号焼土

第２号焼土（第22図、写真図版８）

調査区中央部の平坦地、Ⅳ区Ｅ７グリッドに位置し、第１号焼土の南東１ｍの地点にある。平面形は20×35㎝の不整な楕円形状に広がり、厚さは10㎝程度である。

第22図　第２号焼土

第３号焼土（第23図、写真図版８）

調査区中央部の平坦地、Ⅳ区Ｆ９グリッドに位置する。平面形は50×100㎝の不整な楕円形状に広がり、厚さは10㎝である。

第23図　第３号焼土

第４号焼土（第24図、写真図版８）

調査区中央部の平坦地、Ⅴ区Ｈ３グリッドに位置する。第９号土坑と重複し、本焼土は土坑の埋土の上に形成されており、本焼土の方が新しい。平面形は30×40㎝の楕円形状に広がり、厚さは４㎝程度である。東端の焼土の上に炭化物が認められた。

第24図　第４号焼土

第５号焼土（第25図、写真図版８）

調査区東側の平坦地、Ⅵ区Ｃ１グリッドに位置し、第２号竪穴住居跡の東３ｍの地点にある。平面形は60×80㎝の不整な楕円形状に広がり、断面形は帯状の船底形に形成され、厚さ６㎝程度である。窪んだ中央部分には黒色土が入り込んでいる。

第25図　第５号焼土

V．遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、土器・石器・陶磁器である。土器は縄文土器、土師器の細片で、その総量はそれぞれ小コンテナ1箱に満たない。石器は7点である。他にフレークが6点あり、そのうち3点は黒曜石である。陶磁器は16点出土したが、近世から近代にかけての小破片であり報告を割愛した。

1．土　器

縄文土器は、単節斜縄文の地文のみの体部破片が多く、時期や特徴を明記できるものはごく僅かである。ここでは特徴をもつ土器のみをとりあげ分類した。縄文土器は時期によって第Ⅰ群と第Ⅱ群に大別し、さらに施文方法・文様の種類・胎土などにより細分した。第Ⅲ群と第Ⅳ群にはそれぞれ後北式土器と土師器を当てた。

第Ⅰ群土器…縄文時代早期に属すると思われる土器群

a類：貝殻文腹縁連続波状圧痕が施されているもの

b類：沈線と貝殻腹縁圧痕及び刺突痕を有するもの

c類：沈線あるいは条痕を有するもの

d類：表裏面に縄文が施文されているもの

e類：表面のみに縄文が施文され、植物性繊維を含まないもの

f類：表面のみに縄文が施文され、植物性繊維を含むもの

g類：無文のもの

第Ⅱ群土器…縄文時代後期から晩期に属すると思われる土器群

a類：羽状縄文が施文されるもの

b類：隆帯によって文様構成されるもの

c類：磨消縄文を有するもの

d類：雲形文を有するもの

第Ⅲ群土器…後北式に属すると思われる土器群

第Ⅳ群土器…土師器

第Ⅰ群a類（第26図19・20、写真図版10）

19・20は胴部破片である。いずれも器面に対して貝をほぼ直角に当てている。押圧された腹縁の1単位の長さは19が3㎝、20が2㎝程度で、小さめの貝を使用しているものと思われる。内面にはともにナデ調整の痕が認められる。19は上方に横走する圧痕列1条見えるが、突

端の丸い棒状工具で浅く押し引きしたものと思われる。

第Ⅰ群ｂ類（第16図21、写真図版10）

1片のみ耕作土からの出土である。口唇部直下に2条の沈線を施し、その上から貝殻腹縁を押圧している。縦位・斜位の腹縁圧痕は、沈線を施さないで直接押圧している。刺突痕は円錐状で、突端が鋭利な刺突具を使用していると思われる。

第Ⅰ群ｃ類（第26図22～25、写真図版10）

いずれも細片でしかも磨耗している。22・23は多条沈線、24・25は条痕と思われる。器厚は24以外は薄手である。

第Ⅰ群ｄ類（第26図26～31、写真図版10、11）

全てＲＬの単節縄文であるが、26～29、31は太い原体をしているのに対し、30はそれより細い原体が使用されている。29は右上隅が剝落しているが、その面にも同一原体で同一方向の縄文が施されている。30・31は口縁部破片であるが縄文が斜位に施されている。27は底部付近の破片で上半が横位に、下半が斜位に施文されている。

第Ⅰ群ｅ類（第26図32～35、写真図版11）

32・33は同一個体である。33は尖底土器の底部付近、32は胴部と思われるが、胴部と底部付近の施文の方向が異なっている。また、33の上方向の一部に節の見える部分があり、2種の原体を使用している可能性がある。34・35はＬＲの単節の原体を施文している。36は湾曲の度合いからみて尖底部付近の破片と思われる。

第Ⅰ群ｆ類（第27図39、写真図版10）

少量の植物性繊維を含み、底部が外側に張り出している。底面にも縄文が施された痕跡が僅かに見える。

第Ⅰ群ｇ類（第26図37・38、写真図版11）

器厚が13㎜と厚手で、外面に縦方向の磨きがあり、内面は凹凸があってナデなどの調整痕はみられない。

第Ⅱ群ａ類（第27図40・41、写真図版11）

撚りの方向の異なる2種の原体を、結束させずに羽状を施文している。

第Ⅱ群ｂ類（第27図42、写真図版11）

1片の出土である。頸部に2条の平行沈線を巡らせ、隆帯状の効果を出している。肩部には隆帯が2条横走するが、隆帯の脚部は丁寧に調整した上に棒状工具によって浅い沈線が引かれ、頸部の文様と一見同じにみえる。この2条の隆帯を結ぶように縦長の張り付けが施され、上方の隆帯の右側に橋状把手の破損と思われる痕跡が残る。

第Ⅱ群ｃ類（第27図43・44、写真図版11）

43は灰褐色、44は黒色で光沢がある。44は43に比し、焼成は良く緻密で固い。

第Ⅱ群ｄ類（第27図45、写真図版11）

45は口縁破片である。内面はミガキ調整されている。焼成は良く緻密で固い。

第Ⅲ群（第27図46、写真図版11）

微隆起線は摘み出しによるもので、断面が三角形になるような明瞭な稜をもっている。刺突文は右斜方向から先端が鋭利な棒状工具により施文されている。器表面は黄褐色と黄橙色の縞模様をなすが、化粧土の上に朱塗りを施しているものと思われる。内面は黒褐色である。やや脆弱である。

第Ⅳ群（第27図47・48・49、写真図版11）

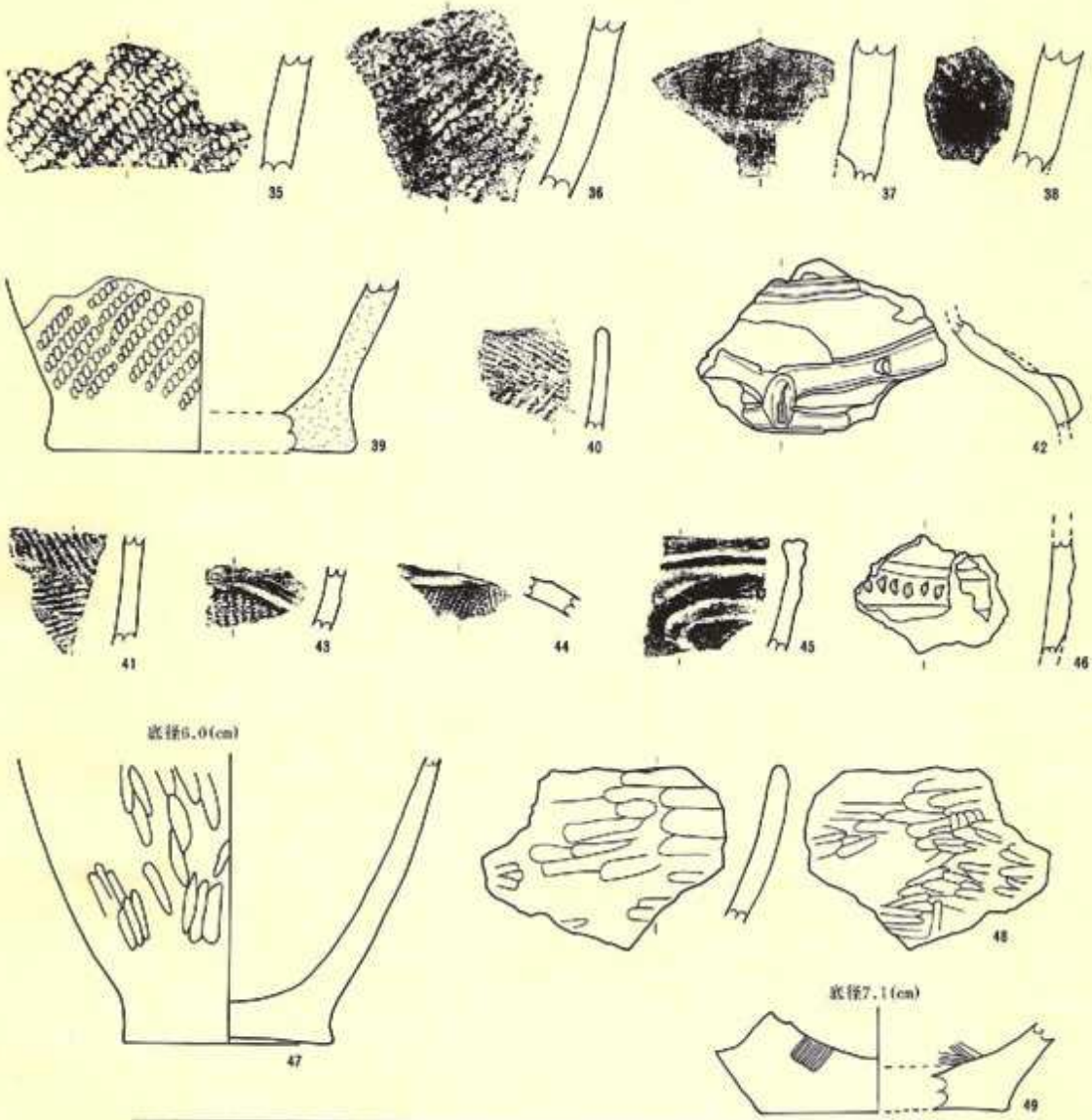
磨耗が著しく、調整方法などは明瞭でない。全体に焼成は良く緻密で固い。48は有段の坏の破片であるが、棒状工具又は篦状工具を横引きすることによって段を作り出されている。

2．石　器（第28図12～18、写真図版11）

12の石鏃は先端部も茎部も破損している。13の石鏃の断面形は偏平である。14は不定形石器で片面に使用痕がみられるが、明瞭な刃部とはいい難い。15の凹石は、少なくても3カ所以上の使用痕が認められる。16は表裏両面の中央部に擦痕が認められ、滑らかで光沢がある。17・18はいずれも断面が三角形の磨石である。

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴	胎 土	分類	写真図版
19	ⅠB2，Ⅰ層	深鉢	胴部	貝殻腹縁圧痕文	粗砂、雲、多量含	Ⅰ－a	10
20	ⅠB2，Ⅲ層上面	深鉢	胴部	貝殻腹縁圧痕文	粗砂、雲、多量含	Ⅰ－a	10
21	ⅠC3，Ⅰ層	深鉢	口縁部	貝殻腹縁圧痕文＋刺突文、口縁部貝殻文	沼鉄、石英含	Ⅰ－b	10
22	ⅤE5，Ⅳ層上面	深鉢	胴部	表裏条痕文	沼鉄含	Ⅰ－c	10
23	不明。	深鉢	胴部	表裏条痕文	沼鉄含	Ⅰ－c	10
24	ⅤG7，Ⅰ層	深鉢	胴部	条痕文	沼鉄、粗砂、雲含	Ⅰ－c	10
25	ⅦE2，Ⅲ層上面	深鉢	胴部	条痕文	沼鉄、粗砂、雲含	Ⅰ－c	10
26	ⅠB2，Ⅰ層	深鉢	胴部	単節表裏縄文	沼鉄多量、長石、石英含	Ⅰ－d	10
27	ⅠB2，Ⅰ層	深鉢	胴部	単節表裏縄文	沼鉄、雲含	Ⅰ－d	10
28	ⅠB5，Ⅰ層	深鉢	胴部	単節表裏縄文	浮石粒、石英含	Ⅰ－d	10
29	ⅠC5，Ⅲ層上面	深鉢	胴部	単節表裏縄文	沼鉄、雲含	Ⅰ－d	10
30	ⅠC5，Ⅳ層上面	深鉢	口縁部	単節表裏縄文、口縁部調文圧痕	沼鉄、石英、粗砂含	Ⅰ－d	11
31	ⅠB2，Ⅰ層	深鉢	口縁部	単節縄文（裏不明）、口縁部縄文圧痕	長石、粗砂含	Ⅰ－e	11
32	ⅦC3，Ⅳ層上面	深鉢	胴部	無節又は縄い節による縄文	金雲母、雲含	Ⅰ－e	11
33	ⅦC3，Ⅳ層上面	深鉢	胴部	無節又は縄い節による縄文	金雲母、雲含	Ⅰ－e	11
34	ⅠB5，Ⅲ層	深鉢	胴部	単節縄文	沼鉄、雲、長石、繊維	Ⅰ－e	11

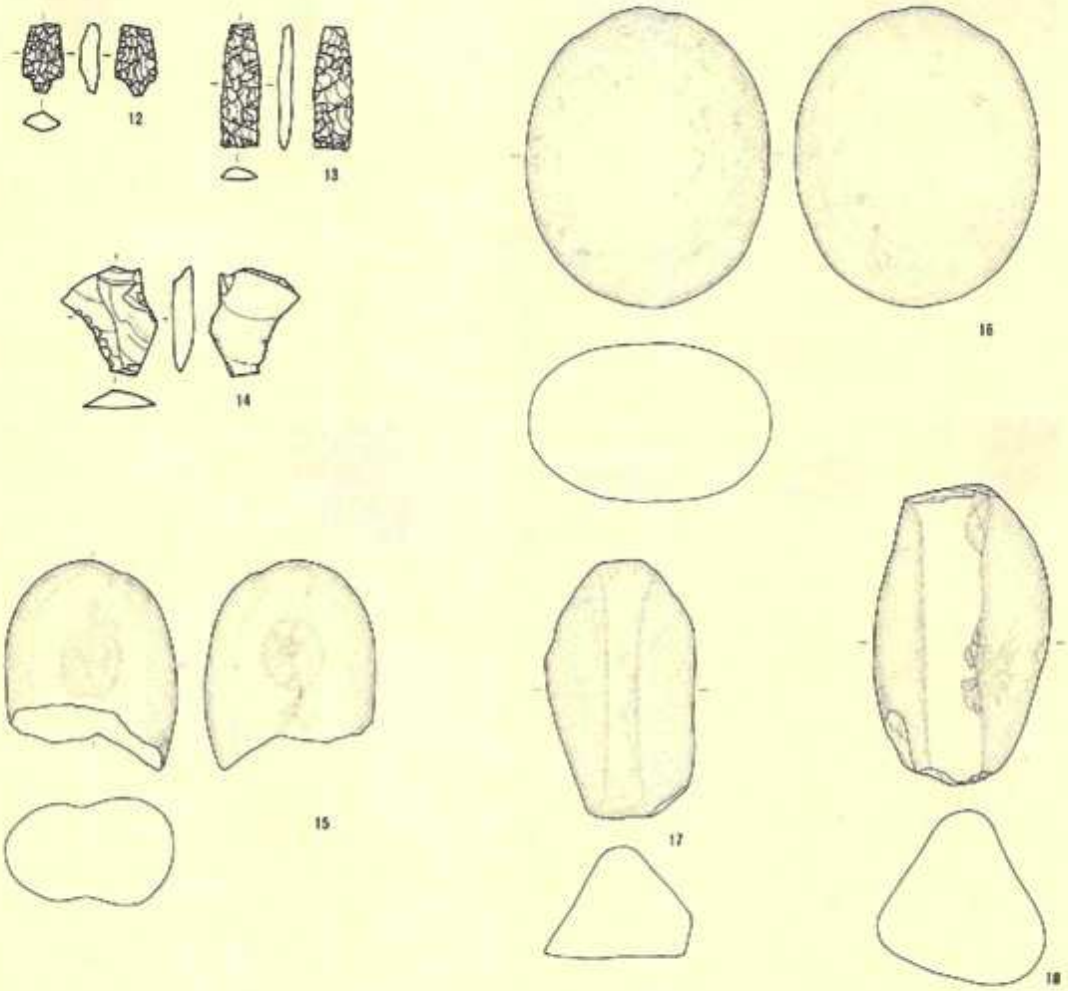
第26図　遺構外出土遺物、土器(1)



番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴	胎土	分類	写真図版
35	ⅠB5－Ⅲ層	深鉢	胴部	単節縄文	沼鉄、礫、長石、繊維	Ⅰ－e	11
36	不明	深鉢	胴部	単節縄文	礫、長石、石英、繊維	Ⅰ－e	11
37	ⅠC5－Ⅲ層中面	深鉢	胴部	無文（縦方向のミガキ）	礫、粗砂、石英多量	Ⅰ－g	11
38	ⅠC5－Ⅲ層中面	深鉢	胴部	無文（縦方向のミガキ）	礫、粗砂、石英多量	Ⅰ－g	11
39	VG7，Ⅰ層	深鉢	底部	単節縄文	沼鉄、浮石、繊維	Ⅰ－f	11
40	ⅥE9，Ⅰ層	深鉢	口縁部	非結束羽状縄文	粗砂含	Ⅱ－a	11
41	ⅥD1，Ⅰ層	深鉢	胴部	非結束羽状縄文	粗砂、石英含	Ⅱ－a	11
42	ⅠB9，Ⅰ層	壺	肩部	平行沈線と隆帯、朱塗りの痕跡	金雲母、長石含	Ⅱ－b	11
43	ⅠG3，Ⅰ層	鉢？	胴部？	磨消縄文	粗砂、石英含	Ⅱ－c	11
44	ⅠD7，Ⅱ層	不明	不明	磨消縄文	緻密	Ⅱ－c	11
45	ⅣE2，Ⅲ層	鉢	口縁部	雲形文、口縁部に一条の沈線	緻密	Ⅱ－d	11
46	VG3，Ⅲ層	不明	不明	微隆帯、化粧土、三角形の刺突文	粗土含む黒色土	Ⅲ	11

番号	出土地点	器種	部位	文様の特徴	表面 外面	表面 内面	分類	写真図版
47	VG8，Ⅱ層	壺	底部	ロクロ未使用	ヘラミガキ	不明	Ⅰ－a	10
48	ⅠB9，Ⅰ層	坏	口縁部	ロクロ未使用	ヘラナデ	ヘラミガキ、黒色処理	Ⅰ－a	10
49	ⅠD10，Ⅰ層	壺	底部	ロクロ未使用	ヘラナデ	ヘラナデ	Ⅰ－b	10

第27図　遺構外出土遺物、土器(2)



番号	出土地点・層位	器種	法量 (cm) 長さ	幅	厚さ	重量(g)	石質	写真図版
12	ⅠB10 Ⅰ層	石鏃	1.7	1.1	0.4	0.8	珪質細粒凝灰岩	11
13	ⅦE1 [illegible]層	〃	3.1	1.0	0.3	1.2	珪質凝灰岩	11
14	ⅦF4 [illegible]層上面	不定形石器	2.7	2.1	0.4	2.8	珪質頁岩	11
15	ⅠC5 [illegible]層	剥片	8.1	6.6	4.1	300	凝灰質細砂岩	11
16	ⅤA8 [illegible]層上面	磨石	11.5	9.4	6.3	1000	デイサイト	11
17	ⅠC5 [illegible]層中面	〃	10.0	5.8	4.9	280	硬砂岩	11
18	ⅠC6 [illegible]層中面	〃	11.5	6.8	4.5	620	輝石安山岩	11

第28図　遺構外出土遺物、石器

Ⅵ. まとめ

1．遺構

(1) 竪穴住居跡

ア．縄文時代の竪穴住居跡

本住居跡は平面形が楕円形、断面形がいわゆる皿状である。貝殻文系の土器が共伴するものの、床面から赤御堂式に比定される土器が多く出土していることから、時期は、縄文時代早期末葉と思われる。

該期の住居跡の県内の類例は、浄法寺町飛鳥台地Ⅰ遺跡の1棟だけである。県内で、赤御堂式期と近い早稲田5類期の住居跡を検出した大渡野遺跡の例を合わせて対比したのが次の表である。

第2表　県内早期末葉竪穴住居跡の比較

遺跡名	糠口Ⅰ遺跡	飛鳥台地Ⅰ遺跡	大渡野遺跡	
遺構名	第1号竪穴住居跡	DⅢ-11竪穴住居跡	Ca 56竪穴住居跡	Cf 12竪穴住居跡
平面形	不整楕円形	凸辺隅丸方形	円形ないし東西にやや長い楕円形	扁楕形
規模	4.25 × 3.44 m	2.4 × 2.8 m	3.5 × 2.3 m	2.4 × 1.95 m
面積	7.8 ㎡	4.5 ㎡		
炉	検出されない	伴わない	検出しえない	認められない
柱穴	全て壁際に位置する	主柱穴と壁柱穴又は壁柱穴だけ	4ケ検出され、1ケは床面中央に、残りは壁際	検出できない
壁の傾斜	緩やか	外傾	緩い傾斜	傾斜するが西側は比較的急
壁高	20 cm	壁高54～27cm	0.09 m	0.243 m
その他	中央部に堅い粘土質土	張り出し部を持つ	2 m西に屋外炉穴	

本遺跡と飛鳥台地Ⅰ遺跡の、赤御堂期の住居の共通する点は、①住居内に炉を伴わない、②壁際に柱穴が回る、の2点である。大渡野遺跡の住居とも住居内に炉を伴わない点は共通する。規模は、長軸が2～5mの範囲に収まる。

類例が少ないので、東北北部の青森県と秋田県の該期の竪穴住居跡について検討すると次のようなことが言える。

青森県では、八戸市長谷地2号遺跡で14棟（注1）、同市売場遺跡で6棟、六ケ所村表館(1)遺跡で8棟他の類例が見られる。秋田県では、熊代市寒川Ⅰ遺跡で7棟検出されている。

上記の都合35棟を検討すると、平面形は方形、隅丸方形、楕円形、円形と各種ある。規模は、長谷地2号遺跡に床面積で65.78㎡のものがある一方で、寒川Ⅰ遺跡では4.8㎡のものもあり、これも小型から大型まで様々である。住居内の炉の有無についても一様ではない。住居内に焼土が形成されているものが16棟あるほか、寒川Ⅰ遺跡では灰床炉の可能性が考えられている住居があり、その観点で青森の例を再検討すれば、同様の例は増加すると思われる。また、大型住居内には焼土が1カ所のみならず2～3カ所検出されている例もある。柱穴は検出されていないものもあるが、青森県の例では壁に沿うものが多く、秋田県の例ではそのような傾向はみうけられない。

以上青森県・秋田県の例から、該期の竪穴住居は必ずしも1つの型におさまるものでなく、様々な類型があることを想定しなければならない。規模と炉数と位置、柱穴の位置などを詳しく検討すれば時期差や地域性等、一定の法則性がみいだせるかも知れないが、ここでは多様性の存在を指摘するにとどめる。

岩手県内から該期の住居跡の検出が2例だけという現段階では、本遺跡の第1号竪穴住居跡は、多様性の中の1例としておさえておきたい。

イ、奈良時代の竪穴住居跡

本住居跡は焼失家屋であり、床面積上から出土した土師器甕の胴部下半部や坏の破片から奈良時代の住居跡と考えられる。

炭化材の樹種はほとんどがクリであるが、一部針葉樹（マツ又はスギ）も含まれる。クリは断面形から丸木材の他に、割材または板材と考えられる。針葉樹は極めて細い丸木材である。これらのうち、クリが柱、梁等の上屋材に用いられたと思われるが、その構造を推定するに足る資料は得られていない。

樹木の炭化物の下およびその周辺から出土した草性の炭化物はススキと鑑定された。これは屋根の葺材として用いられたものと思われる。

埋土上位に堆積していた火山灰は白頭山起源のものであり、中位のものは十和田a降下火山

灰であると鑑定された。埋土は自然堆積の様相を示しており、第5層が堆積後に十和田a、さらに間層を狭んで白頭山各火山灰が堆積している。このことから、次の事柄が推定される。①この住居跡は焼失してそのまま放置された。②十和田a火山灰が降下した10世紀初めごろには、中央部で10㎝程埋まっていた。③白頭山火山灰が降下するころには、かなり埋もれていたが、上面は窪んでいた。

本竪穴住居跡の床面から出土した粘土塊と、壁際の床面に薄くブロック状に分布していた粘土とは、成分が異なるものであると鑑定された。これは検出・出土状況と合わせて使用目的が異なることをうかがわせる。粘土塊と、同じく床面から出土した土師器の小破片3点との成分比較では、2点が同粘土を素材とした可能性があり、1点は遠く離れた外部地域からの搬入品と推定されると鑑定された。本竪穴住居で使用されていた土師器は、自給品と搬入品と両者が存在する可能性が高い。

(2) 土 坑

11基検出したが、規模によって次の3種に大別できる。

第3表　本遺跡土坑の分類

型	規模		該当する土坑
	開口部直径	深さ	
A	1m内外	50㎝程度～それ以下	第1号、第2号、第3号、第4号、第11号各土坑
B	1.5m内外	1m以上	第5号、第6号、第7号、第8号各土坑
C	2m以上		第9号、第10号各土坑

Aタイプは、比較的平坦な場所に位置している点で共通している。埋土は、第1号土坑（以下土坑は略す）は自然堆積、3・4号は人為的な埋め戻しと思われ、2・11号は単層で判断できかねた。遺物は、1号土坑の埋土中位から磨製石斧が出土している。本タイプに分類した土坑は、規模・形状などから縄文時代のものと思われるが、用途は不明である。

Bタイプの土坑の埋土は全て自然堆積であることから、空洞の状態で廃棄されたものと考えられる。5・6・7号は急斜面の同一等高線上に並び、8号も斜面縁辺部に位置している。規模・形状・位置から陥し穴状遺構の可能性も考えられるが、副穴等の施設は湧水のため確認できなかったので断定はできない。

構築された時期については、埋土に十和田a降下火山灰を含まないことからその時点では既

に埋まっていると想定されること、及び本遺跡出土の遺物が縄文時代と奈良時代に集中することなどから、縄文時代と考えられる。8号は中撫浮石相当層を掘り込んでいることから縄文時代前期より新しいものと思われる。5・6・7号は南部浮石層を掘り込んでいることは明白であるが、中撫浮石相当層を欠いているので明言はできない。

Cタイプは、底面に凹凸がみられる点、埋土上位に十和田a降下火山灰が堆積する点で共通する。同火山灰の堆積状況は、10号の場合は厚さ40㎝に亘ってレンズ状に堆積しているのに対し、9号土坑のそれはブロック状である。9号・10号間は60ｍの隔たりで環境的には大きく異ならないと思われるが、堆積状況が違うことから、この2つの土坑の構築時期は異なると思われる。

10号からはロクロ未使用の土師器の甕の口縁部破片が出土しており、火山灰の堆積状況と考え合わせて、奈良時代のものと思われる。土坑の性格は、柱穴が検出されなかったこと、多くの炭化材が出土したこと、規模等から炭窯跡の可能性も考えられるが、樹種は通常炭材に使用されないものと鑑定された。この炭化材は断面形からは丸木材と判断されたが、太さはいずれも直径5㎝程度である。これを上屋を構成した材料と想定すると本土坑は焼失した小屋状の竪穴遺構の可能性が考えられる。

奈良時代の遺構は本土坑と竪穴住居跡の2つであるが、両者は20ｍの距離にあること、火山灰が層状の堆積状況を示していること、および両者とも焼失していることから、同時に存在した可能性が高く、本土坑は竪穴住居の付属施設とも考えられる。

9号については、時期、用途とも不明である。

(3) 陥し穴状遺構

溝状の陥し穴状遺構を2基検出した。1基は中撫浮石層を掘り込んでいる。中撫浮石の降下時期は縄文時代前期初頭から前期末葉といわれる（注2）から、前期初頭以降のいずれかの時期に構築されたことは確かであるが、それ以上の時期特定の資料は得られなかったので不明である。他の1基は南部浮石層を掘り込んでいるが、中撫浮石層を欠くためこの2つの遺構が同時期かどうかは不明である。

(4) 焼土

中撫浮石層の上面で検出されているが、使用期間、用途等の詳細は不明である。

2．遺物

(1) 各土器群の位置づけ

第Ⅰ群とした土器は早期に位置づけられる。

a類土器は貝殻腹縁連続波状圧痕文が施文されている。この施文法は吹切沢式において盛行するが、青森県三沢市根井沼遺跡出土の土器にも同手法が用いられている（注3）。根井沼遺跡の土器は、白浜式と寺の沢式の間に位置すると考えられている（注4）ことから、a類は白浜式から吹切沢式までの時間的幅をもたせた、いわゆる吹切沢式系統の土器とするにとどめたい。

b類土器は、口縁に小突起をもつ器形や沈線と貝殻腹縁による幾何学的文様、及び口縁部内側にも貝殻腹縁による刺突を施しており、物見台式に比定される。吹切沢式と物見台式の前後関係については論議のあるところだが、本遺跡のa類、b類土器の出土層位はⅢ層より上であり、両者とも後世に流れ込んだものと思われ、詳細は不明である。

c類土器の多条沈線文と条痕文はムシリⅠ式に類似する。

d・e類土器は、縄文を多用する尖底土器群で赤御堂式に比定される。本類は本遺跡を特徴づける土器群と思われることから、他の遺跡との比較を含め後述することにしたい。

f類土器は、植物性繊維を含み、底部が外側に張り出す特徴が早稲田5類に類似する。表館(1)遺跡においてはⅨ群土器を設定し、早稲田5類の中でもより新しく位置づく土器群としている（注5）。その詳述は避けるが、特徴の一つとして植物性繊維を含む量が少なくなり、綾杉状縄文などの特殊な縄文施文から単節縄文へ変化していくという傾向性が見られる。本群土器も植物性繊維の含有が少量で、単節縄文が施文されていることから、早稲田5類の中でも新しい段階である表館Ⅸ群土器に相当すると思われる。

g類土器は、無文のため明確ではないが、器厚と胎土・器形等の特徴から貝殻文系土器の胴部下半の破片と思われる。

第Ⅱ群土器は、後期から晩期までの土器である。

a類土器は、胎土・器厚・原体などから前期の羽状縄文系のものと異なることは明らかだが、型式名の特定はできない。

b類土器は、壺形土器の肩部と思われるが、平行沈線や隆帯から十腰内Ⅰ式に比定される。

c類土器は、磨消手法から後期から晩期の土器と考えたが、型式名の特定はできない。胎土・焼成・施文された縄文のきめの細かさなどから、1点は後期、他の1点は晩期と思われる。

d類土器は、雲形文と口唇部に沈線が施されている特徴から、大洞C_1またはC_2に比定される。

第Ⅲ群土器は、胴部破片であり、微隆起線・化粧土・三角形の刺突文などの特徴から、後北

C 2式土器と思われる。

第Ⅳ群土器は、明確な特徴はないがロクロを使っていないことから、奈良時代のものと思われる。

(2) 本遺跡出土の赤御堂式土器について

ア、位置づけ

本遺跡から多く出土した第Ⅰ群d類・e類土器の特徴は次の通りである。

・口縁部は平縁だけである。器形が分かるものは、いわゆる砲弾形の尖底深鉢である。

・表裏縄文と表縄文裏無文の2種類ある。

・表裏縄文土器は、表裏とも同一原体によって施文される。

・特殊な原体はなく、d類は全て単節である。

・口縁部文様帯をもつものは、1点だけで他は口縁部下から縄文が施される。

・隆帯・沈線文・刺突文はない。

・植物性繊維を含まない。

赤御堂式は青森県早稲田貝塚における層位関係から、ムシリⅠ式と早稲田5類の間に位置することが明らかであるもののその型式内容は必ずしも明確でなく、かなりの時間的幅をもつものとして、はやくから細分の可能性が指摘されている（注7）。最近、売場遺跡や表館(1)遺跡などの調査によって新資料が加えられ、本型式の内容や変遷の過程について論じられるようになってきた。ここでは、それらの新しい資料や県内の同型式の土器と本遺跡の土器を比較してみたい。

県内の赤御堂式土器の出土遺跡は、浄法寺町飛鳥台地Ⅰ遺跡、同町五庵Ⅲ遺跡、滝沢村仏沢Ⅲ遺跡、矢巾町大渡野遺跡、住田町蛇王洞遺跡、大船渡市関谷洞窟遺跡、大槌町崎山弁天遺跡などがある。

矢巾町大渡野遺跡の例では、第2群土器を縄文条痕系の土器群として分類し、a類は表縄文・裏無文、b類は表裏縄文と細分している。b類は更に次のように三分される。（注8）

b 1類……平縁に近いが口唇部無文のものとし、縄文原体側面圧痕あるいは縄文を付し、広義の小波状口縁風にしたもの

b 2類……表面口縁端部や下位に鍔状に粘土帯を添付し隆帯を形成

b 3類……表面は地文に縄文、その上に刺突文・沈線文の両者を加える。裏面には同一原体と思われる縄文が付される。胎土・焼成・色調などがa類されには第1群土器に類似する。

このうち、b 3類と同様のものは、浄法寺町五庵Ⅲ遺跡（Ⅰ群4類）や飛鳥台地Ⅰ遺跡（Ⅰ

群5類）にみられるが、比較的まとまって出土した例としては八戸市赤御堂遺跡（V群）がある。

赤御堂遺跡では、V群土器の特徴として「口縁部の縦位・斜位の沈線帯、縦位の列点帯、口縁部及び口縁端に隆帯、口縁や底部内面に極めて浅い縦位の沈線」などを挙げ、ムシリI式の要素を強く保育するものであり、赤御堂式の中でも古段階として位置づけている（注9）。

八戸市売場遺跡でも、第Ⅷ群土器という、ムシリI式と赤御堂式をつなぐ土器群を位置づけている（注10）が、その特徴は矢羽根状沈線文・沈線文＋刺突文である。この土器群は、大渡野遺跡では、第I群b類・c類とされた土器群と同一のものとみられ、更に古いタイプのものと思われる。

このことから、ムシリI式→大渡野第I群（売場Ⅷ群）→大渡野第II群b3類（五庵ⅢI群4類、飛鳥台地I群5類、赤御堂V群）の図式がまず考えられる。

六ケ所村表館(1)遺跡では、ムシリI式と早稲田5類の層の間から、Ⅵ群と名付けられた土器群が出土している。その文様要素は、縄文、綾絡文、縄の側面圧痕文が圧倒的に多い。また、器形の特徴としては平底の深鉢形土器である点で共通するが、口縁部が変化のないものと、幅の広い隆帯貼り付けによる折り返し状口縁を持つものがある。報告者はこのⅥ群を、赤御堂式の古い段階に位置づけられるものとしている（注11）。

前述した赤御堂V群の中にも、二重口縁、縄の側面圧痕、平底の土器があることからも、赤御堂遺跡V群と同様、表館(1)遺跡Ⅵ群は赤御堂式の古い様相を示すものと考えて良いと思われる。ただし、赤御堂V群と売場Ⅵ群とが時期的に併行するものか、重複しつつ前後関係をもつものか、あるいは包摂関係にあるのか等詳細については不明であるが、とりあえず両者を赤御堂式の古い段階として把握することにしたい。

次に、赤御堂式の早稲田5類への変移の様相をみると、長谷地2号遺跡では早稲田5類への過渡的段階の土器としてII群を位置づけている（注12）。その特徴は、0段多条・撚り戻し・付加条縄文を主体的に用い、僅かに植物性繊維を混入するものもみられる。同様の土器は売場遺跡でも出土しており、層位的な確認はまだされていないものの、型式学的にはスムーズに推移を推定できる資料である。

今まで述べてきたことにもとづいて、県内の赤御堂式土器を再検討してみる。崎山弁天遺跡の土器群は、その中に口縁部に貼り付け隆帯をもつ土器や折り返し口縁の土器などがあり、表館(1)遺跡報告書でもⅥ群土器との類縁を求められているように、全体として赤御堂のなかでもやや古いほうに位置づけられると考えられる。水沢市大曽根遺跡の出土土器も、口縁部外面の端部に粘土紐貼り付けによる隆帯が2条全周しているという特徴からみて比較的古く位置づくと思われる。

それに比し、雫石町野中遺跡2群a類土器は、無文帯を有さず、口縁部直下から施文され、原体は単節の他に0段多条が多用されていることから、赤御堂式のなかでも新しい様相を示していると思われる。同様に仏沢Ⅲ遺跡11類土器は、全体的に0段多条の原体を用いるのが特徴的であることから、野中遺跡と同時期と考えたい。

以上のことから、本遺跡出土のⅠ群d・e類土器を県内の遺跡との比較において位置づけると、次表に示したように中段階のものと考えられる。

第4表　本遺跡出土の赤御堂式土器の位置づけ

	古　段　階	中　段　階	新　段　階
遺	＜赤御堂遺跡Ⅴ群類縁＞		＜長谷地2号遺跡Ⅱ群類縁＞
	大渡野2群b3類	本遺跡Ⅰ群d、e類	野中遺跡2群a類
	五庵ⅢⅠ群4類	飛鳥台地Ⅰ群6類	仏沢Ⅲ遺跡11類
	飛鳥台地Ⅰ群5類	塩ケ森Ⅱ	
	（新旧関係不明）	大久保Ⅰ群2類	
跡	＜表館(1)遺跡Ⅵ群類縁＞		
	（注13）		
	大渡野2群b2		
	崎山弁天Ⅳ層Ⅲ層		
名	飛鳥台地Ⅰ群6類の一部		
	大曽根		

イ、植物性繊維の含有について

東北北部においては、胎土に植物性繊維を混入させる技術が一般化するのは、赤御堂式土器の終末期または早稲田5類の時期からと指摘されている（注14）。赤御堂式は、青森県出土の土器の場合一般にはまだ植物性繊維を含まないといわれるが、県内の同式土器は必ずしも一様ではない。

本県の赤御堂式土器の植物性繊維の含有についてまとめてみると第5表のようになる（注15）。限られた資料であり、断定はできないとしてもほぼ次のような傾向を指摘することができよう。

・県南沿岸部では、既に該期の古い段階に混入技法が一般的である。北上川流域（特に盛岡周辺）では新しい段階では混入する例が多い。県北部では、該期はまだ植物性繊維を混入

第5表　県内赤御堂式土器の植物性繊維の含有の有無

	県南沿岸部		北上川流域		県北部	
遺跡名	崎山弁天(古)	◎	大曽根(古)（注16）	◎	五庵Ⅲ(古)	×
	関谷洞穴	○	大渡野(古)	×	飛鳥台地(古)	△
	蛇王洞	◎	熊の沢	○	糀口Ⅰ(中)	×
	七日市	◎	大新	－	大久保	×
			塩ケ森Ⅱ（注17）	×	安比内Ⅰ	○
			野中(新)	◎		
			仏沢Ⅲ(新)（注18）	○		

「◎」－出土した土器全てに植物性繊維を含む。「○」－植物性繊維を含むものと含まないとある。「△」－植物性繊維を含むものはごくごく少量である。「×」－植物性繊維を含まない。「－」－報告書に植物性繊維の含有について記載がない。

アの項の編年観に基づいて新旧関係が想定できるものについては「新」「中」「古」と記号化して表した。

させない方が一般的である。

このことから植物性繊維を混入させる技法は、岩手県においては赤御堂式の時期を過渡期として伝播したと考えられる。

本遺跡は岩手県北部にあって、この時期には植物性繊維の混入技術がまだ取り入れられていない段階であると思われる。

ウ．土器の接合の技法

本遺跡の赤御堂式土器には、次のような点を観察できる破片がある。

・板状に剥落する。（図28・29、図版）

・剥落した器壁の内側にも縄文が施文されている。（同上）

・断面は口縁部側が凸状、底部側が凹状をなす破片が出土している。（図8、図版7）

県内出土の赤御堂式についてこれに類似する報告が、崎山弁天、蛇王洞、塩ケ森Ⅱ、飛鳥台地Ⅰの各遺跡からなされている（注19）。

青森県和野前山遺跡の報告書には、早稲田5類期の土器についてその接合方法が詳しく説明され、赤御堂式期の土器の接合法も、早稲田5類土器と同じ方法によったと考えられる。

和野前山遺跡にあって本遺跡にみられないのは、下方に引き伸ばした痕跡と器面内の指頭押圧痕の凹凸である。しかし、上述した類似点から本遺跡の赤御堂式土器も和野前山遺跡と同様の接合方法によったものと思われる。

注1．文献29による。住居跡14棟は全て長谷地2号遺跡Ⅱ群土器期、すなわち赤御堂式から早稲田5類への過渡的段階のものであるが、概括的には赤御堂式期に入るものと判断して該期住居の類例に数えた。

注2．文献30. p11

注3．長尾正義氏からご指導いただいた。

注4．文献26

注5．三浦圭介氏の分類と位置づけによる（文献5．p352～363）。

注6．文献25. p15～30

注7．鈴木克彦氏（文献1．p307～309）他

注8．文献7．から部分的に引用したもので、原文のままではない。（p312～327）

注9．工藤竹久・村木　淳両氏（文献31. p110～113）

注10. 三宅徹也氏（文献4．p330～331）

注11. 三浦圭介氏（文献5．p303～308）

注12. 村木　淳氏（文献30. p124～126）

注13. 表館Ⅵ群が平底であるのに対し、他の遺跡は尖底である点は明らかに異なる。ここでは「綾絡文、縄の側面圧痕文、貼り付け隆帯」などの特徴に類似性を求め、時期の近似性を想定した。その意味で「類縁」という言葉を用いた。

注14. 大湯卓二氏（文献1．p605）

注15. 報告書にはそれぞれ次のように述べられている。（原文から一部抜粋）

崎山弁天　A1類　胎土は粗く、粗砂、細砂、繊維を含み…

A2類　繊維を含むものと含まないものとがあるが、概して厚手のものに繊維含有量が多く、…

B類　胎土には繊維・雲母を含み、…　（p24～34）

関谷洞穴　7層B類　砂粒を含むものと、わずかに繊維を含むものとある。

C類　胎土には植物繊維を混入しているもの、砂粒を混入しているもの、貝殻の砕いたものを混入しているものなど…　（p7）

蛇王洞　焼成は良好であるが、胎土に砂粒と共に微量の繊維を含み…　（p10）

七日市　いずれも胎土に繊維を含むが焼成は良好…　（文献21. p10）

大曽根　肉眼観察では繊維混入がほとんど認められない。表面的には繊維を混じた形跡がないが、断面でみると、植物性繊維の混入と思われる痕跡を残している。（p202）

大渡野　胎土に繊維を含まず金雲母を含む。（p301）

熊の沢　3類　37の土器片は…少量の繊維を含有し…、38は…繊維の含有はなく…

4類　いずれも植物性繊維を含んでいる。（p 24）

大　新（記載なし）

塩ケ森Ⅱ　胎土に荒い砂と金雲母を含んだ縄文・縄文土器

野　中　胎土には砂粒のほか繊維の混入がみられ、焼成はあまり良くない。（p 188）

仏沢Ⅲ　繊維混入率が極めて低く（未混入のものもある）、…（p 45）

五庵Ⅲ　これらの土器は胎土に火山灰や砂粒を含むが繊維は含まれていない。（p 48）

飛鳥台地　5類　繊維が胎土に少量認められるものと、認められないものがある。

6類　胎土に繊維をわずかに含む例が4点あるが、ほとんどは含まない。

7類　1点が微量の繊維を含む以外は胎土に繊維を含まない。（p 482～484）

大久保　植物繊維は含まないが、小粒の有機質を含んだと考えられる炭化物痕が剥落部で観察される。（p 158）

安比内Ⅰ　2a類　胎土に繊維を含む。

2b類　胎土には繊維を含まない。（p 58）

注16.『大曽根遺跡報告書』のまとめでは「肉眼観察では繊維混入がほとんど認められない。」と述べられており、非混入の方に比重が傾いている。

注17.『塩ケ森Ⅱ遺跡報告書』は、植物性繊維の混入の有無についてはのべていないものの、胎土については記述されており、植物性繊維は非混入と判断して良いものと考えた。

注18. 仏沢Ⅲ報告書に基づくと、赤御堂式に比定された27点中、21点に繊維が混入されている。

注19. 報告書には次のように述べられている。

崎山弁天遺跡　器面が板状に剥離する例が見られる。（p 28）

蛇王洞遺跡　器面が板状に剥離しやすい。（p 10）

塩ケ森Ⅱ遺跡　そのはがれた内面にも同一縄文が施文されている。

飛鳥台地Ⅰ遺跡　断面形は、口縁部側が凹状、底部側が凸になり、青森県和野前山遺跡の報告書で第6群土器について詳細に記述されているような接合方法をとっている。（p 483）

注. 熊谷常正氏には、土器を逐一見ていただき具体的なご指導をいただいた。土器の観察事項など氏の指導によるところが大きい。ただ、赤御堂式土器の細分・編年についての本報告書のまとめは型式学的観点に比重を置いたため、あるいは氏の見解と異なるものとなったかもしれない。氏に迷惑が及ばぬよう責任の所在を明らかにすると共に、氏への感謝の意を表し、今後のご指導を請う次第である。

参考・引用文献

1．青森県教育委員会（1980）：「長谷地貝塚遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書 57 集

2．　〃　（1984）：「和野前山遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告書 82 集

3．　〃　（1985）：「売場遺跡発掘調査報告書（第 1 次・第 2 次）」青森県埋蔵文化財調査報告書 93 集

4．　〃　（1985）：「売場遺跡発掘調査報告書（第 3 次・第 4 次）」青森県埋蔵文化財調査報告書 93 集

5．　〃　（1989）：「表館(1)遺跡Ⅲ」青森県埋蔵文化財調査報告書 120 集

6．秋田県教育委員会（1988）：「一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」秋田県文化財調査報告書第 167 集

7．岩手県教育委員会（1979）：「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅱ－『大渡野遺跡』」岩手県文化財調査報告書第 32 集

8．岩手県埋蔵文化財センター（1982）：「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書『雫石町野中遺跡』」岩手県埋文センター文化財調査報告書第 30 集

9．　〃　（1982）：「御所ダム建設関連遺跡発掘調査報告書『雫石町塩ケ森Ⅱ遺跡』」岩手県埋文センター文化財調査報告書第 31 集

10．　〃　（1982）：「金ケ崎バイパス関連遺跡発掘調査報告書－Ⅲ－『水沢市大曽根遺跡』」岩手県埋文センター文化財調査報告書第 44 集

11．岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1986）：「安比内Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 106 集

12．　〃　（1986）：「五庵Ⅲ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 112 集

13．　〃　（1988）：「飛鳥台地Ⅰ遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 120 集

14．　〃　（1988）：「大久保遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書 121 集

15．岩手県立博物館　（1982）：「岩手の土器」

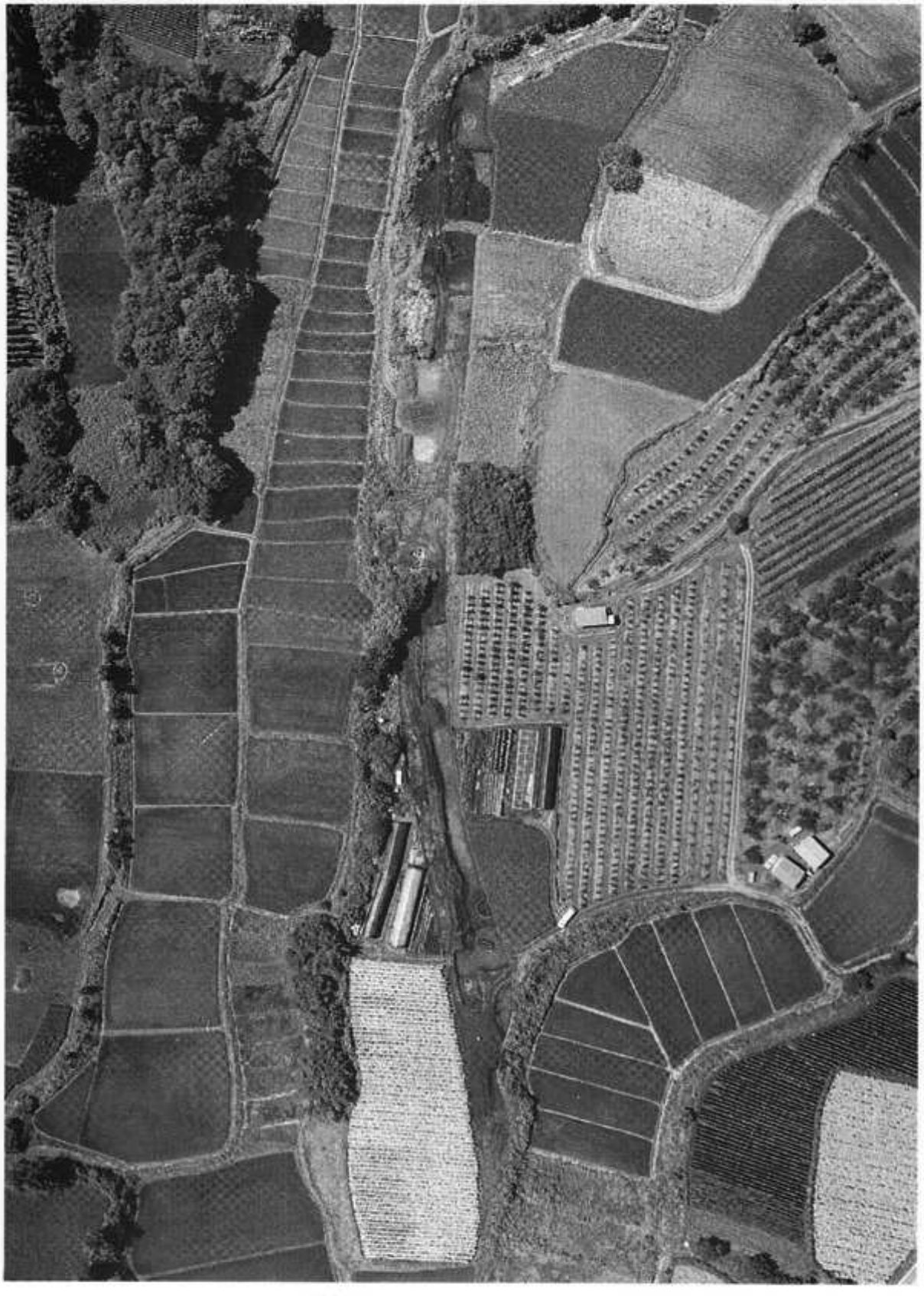
16．及川洵ほか　（1971）：「関谷洞窟調査概要」大船渡市社会教育シリーズ第 14 集

17．大槌町教育委員会（1974）：「崎山弁天遺跡」

18．大船渡市史編集委員会（1978）：「大船渡市史」第 1 巻

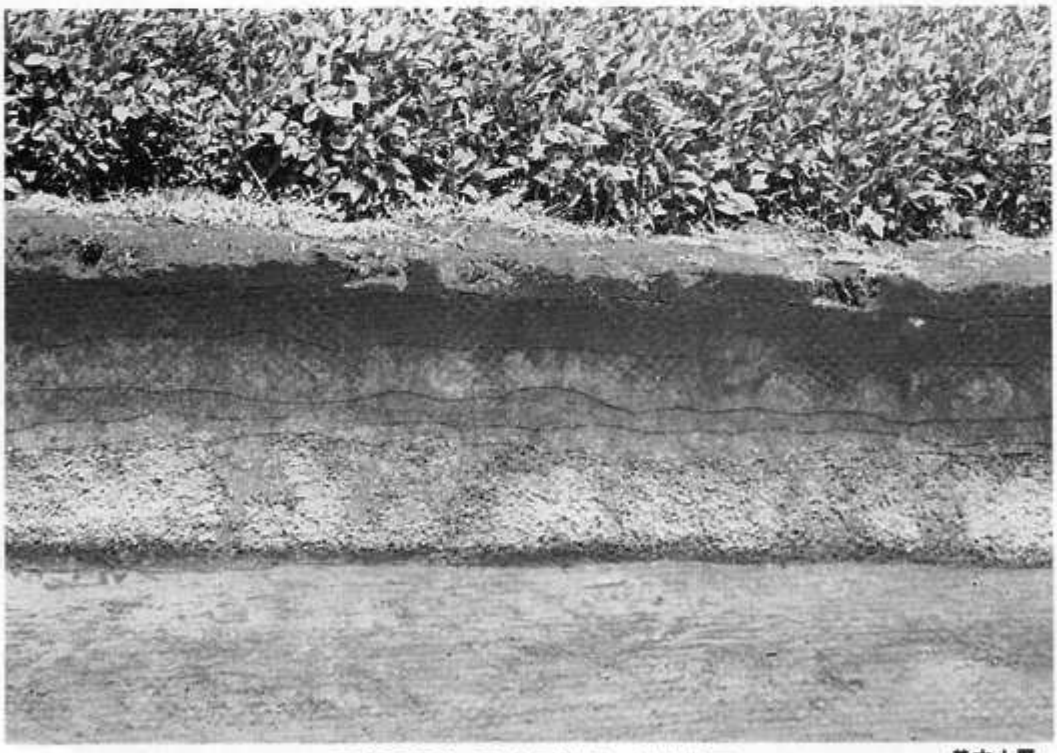
19. 加藤邦雄　(1982):「縄文尖底土器」縄文文化の研究第3巻
20. 草間俊一ほか　(1967):「盛岡市一本松熊の沢遺跡調査報告」郷土資料写真集第10集
21. 熊谷常正　(1983):「岩手県における縄文時代前期土器群の成立－条痕文系土器群から羽状縄文土器群へ－」岩手県立博物館研究報告第1号
22. 〃　(1989):「岩手県の早期後半から前期初頭の土器群について」第4回縄文文化検討会シンポジウム　レジュメ
23. 佐藤達夫ほか　(1957):「青森県上北郡早稲田貝塚」考古学雑誌43－2
24. 芹沢長介・林謙作　(1965):「岩手県蛇王洞洞穴」石器時代No.7
25. 高橋信雄　(1982):「東北地方北部の土師器と古代北海道系土器の対比」北奥古代文化13号
26. 滝沢村教育委員会　(1987):「仏沢Ⅲ遺跡」岩手県滝沢村文化財調査報告書第5集
27. 名久井文明　(1989):「東北地方北部に於ける縄文時代早期貝殻腹縁文土器の系統」第4回縄文文化検討会シンポジウム　レジュメ
28. 八戸市教育委員会　(1976):「赤御堂遺跡発掘調査概要報告書」
29. 〃　(1980):「長谷地貝塚遺跡発掘調査報告書」八戸市埋蔵文化財調査報告書第3集
30. 〃　(1982):「長谷地貝塚遺跡発掘調査報告書谷地2・7・8号遺跡」八戸市埋蔵文化財調査報告書第8集
31. 〃　(1989):「赤御堂遺跡」八戸市埋蔵文化財調査報告書第33集
32. 福田友之　(1986):「考古学から見た『中掘浮石』の降下年代」弘前大学考古学研究第3号

写真図版



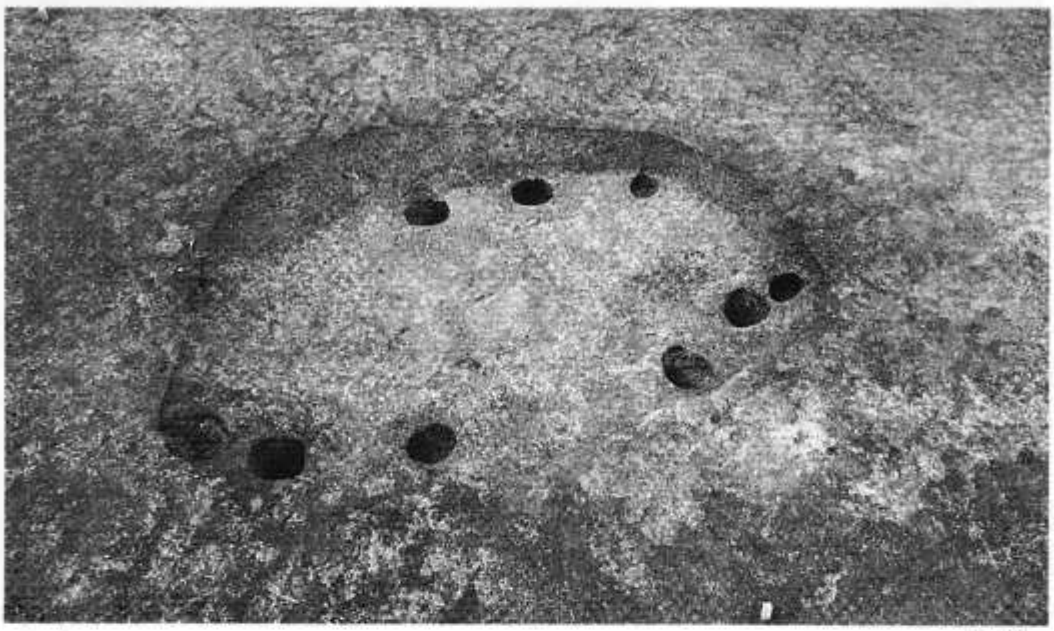
写真図版１　調査区全景（航空写真）

調査区遠景

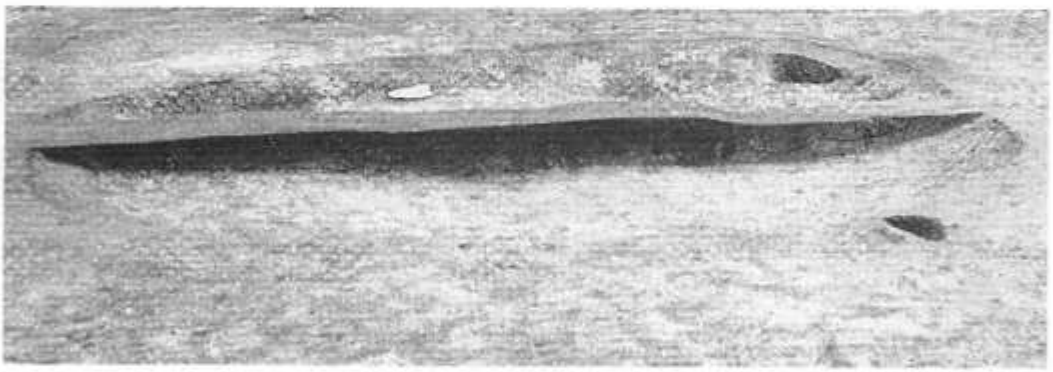


基本土層

写真図版２　調査区遠景・基本土層



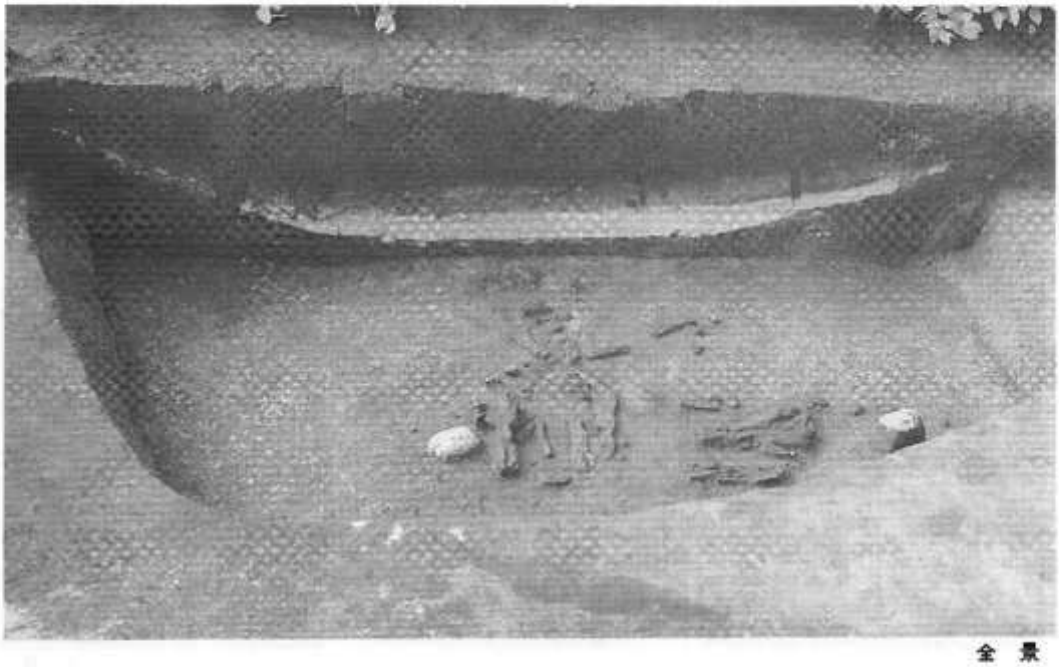
全　景



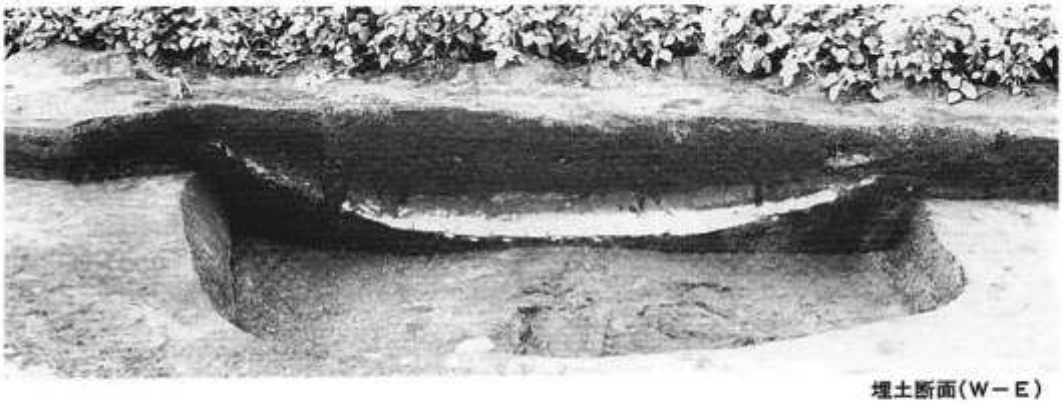
埋土断面(E－W)

写真図版3　第1号竪穴住居跡

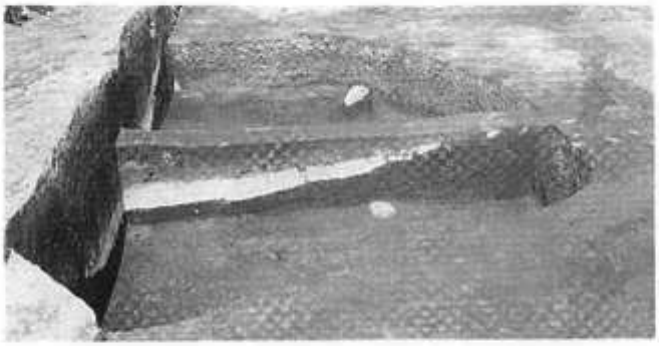
埋土断面(N－S)



全　景



埋土断面(W－E)

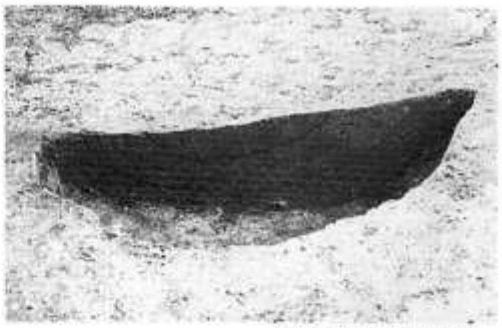


粘土塊出土状況

土器出土状況

写真図版 4　第 2 号竪穴住居跡

第1号土坑　全　景

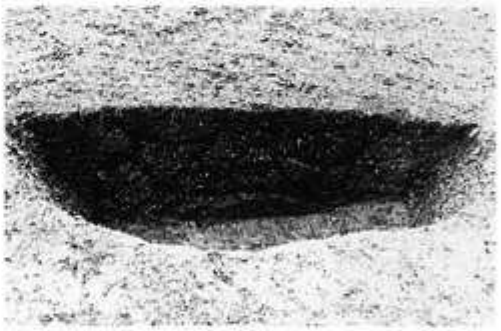


第1号土坑埋土断面

第2号土坑　全　景

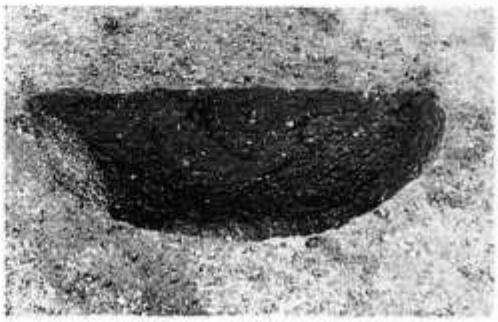
第2号土坑埋土断面

第3号土坑　全　景



第3号土坑埋土断面

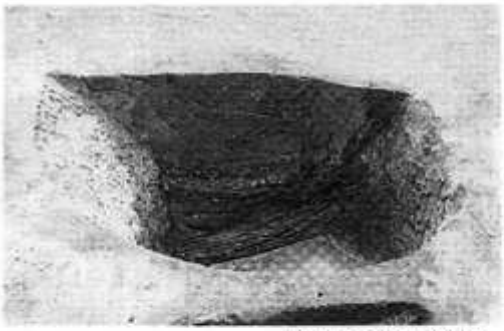
第4号土坑　全　景



第4号土坑埋土断面

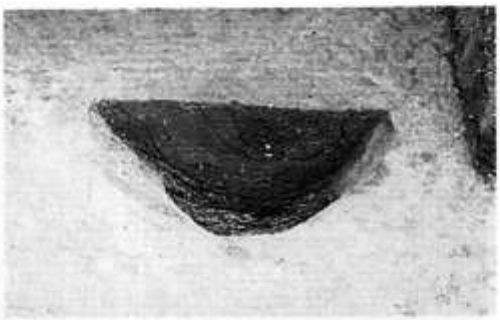
写真図版5　第1・2・3・4号土坑

第5・6土坑　全　景



第5号土坑埋土断面

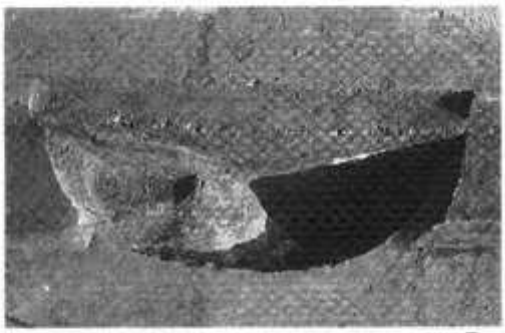
第7号土坑　全　景



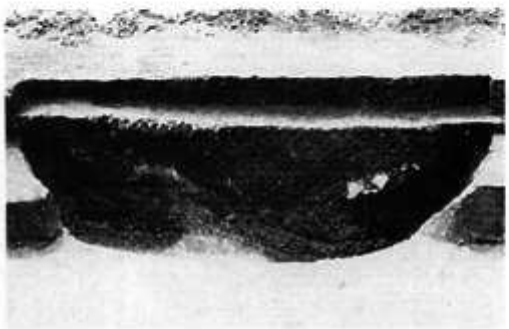
第7号土坑埋土断面

第8号土坑　全　景

第8号土坑埋土断面



第9号土坑　全　景



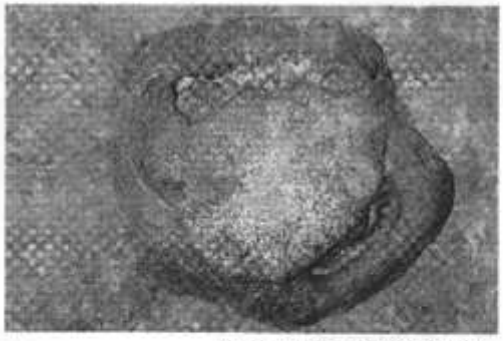
第9号土坑埋土断面

写真図版6　第5・6・7・8・9号土坑

第10号土坑　全　景

第10号土坑　断　面

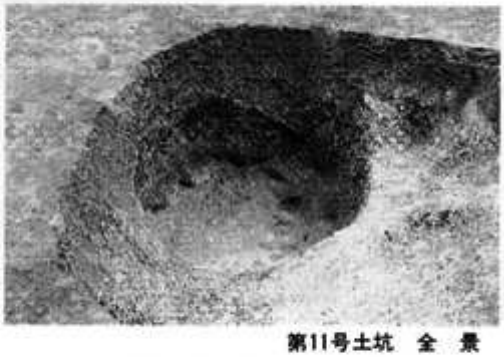
第10号土坑　炭化材分布状況



第10号土坑　焼土分布状況

第10号土坑　焼土ａ断面

第10号土坑　焼土ｂ断面



第11号土坑　全　景

第11号土坑　埋土断面

写真図版７　第１０・１１号土坑

第１号陥し穴全景

第２号陥し穴全景

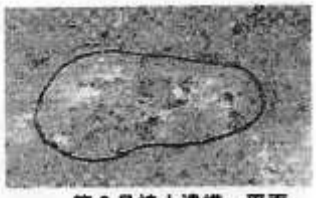
第１号焼土遺構（下）
第２号焼土遺構（上）

第１号焼土遺構　断面

第２号焼土遺構　断面

第１号陥し穴埋土断面

第２号陥し穴埋土断面



第３号焼土遺構　平面

断面

第４号焼土遺構　平面

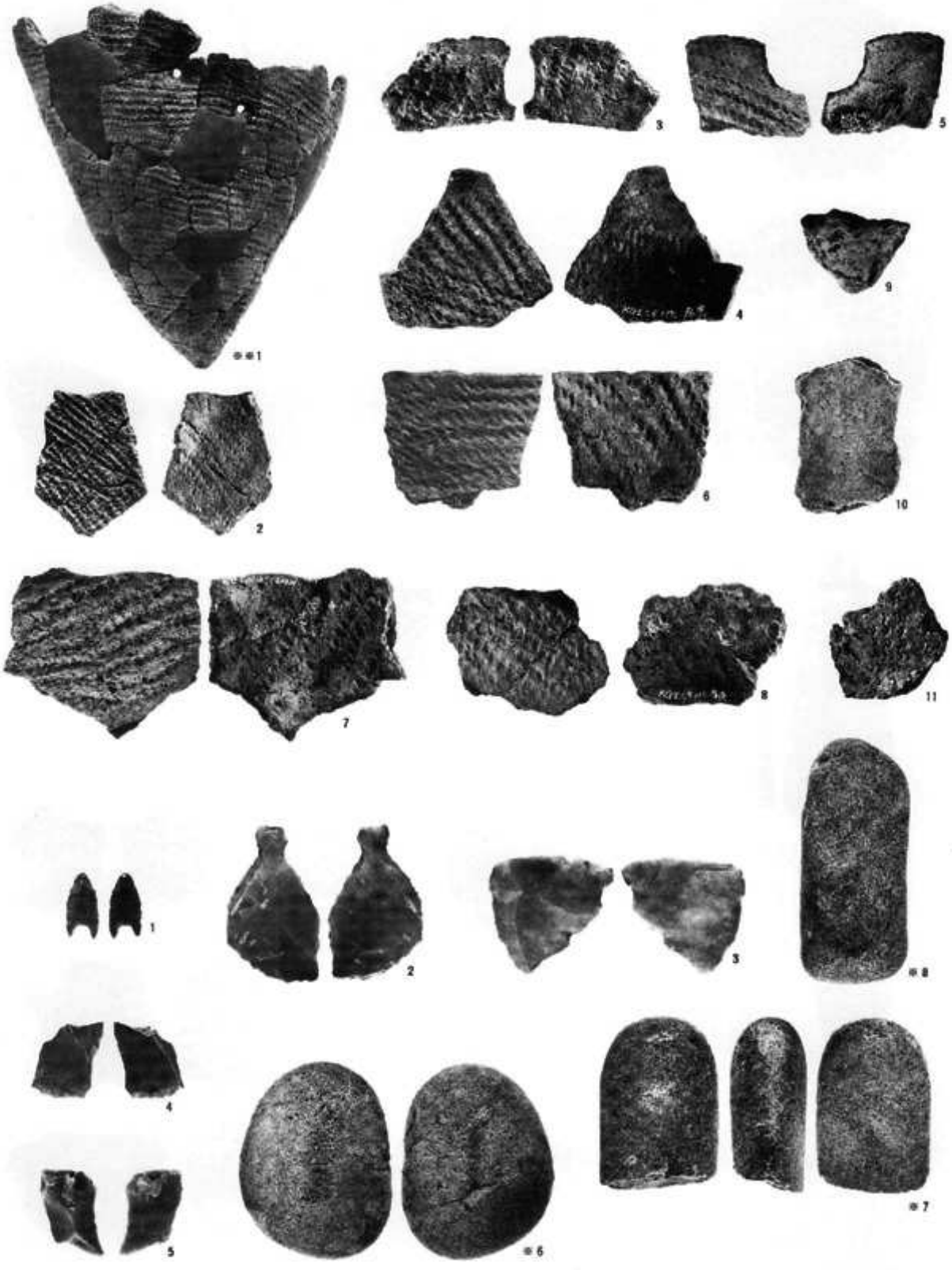
第５号焼土遺構検出状況

調査風景

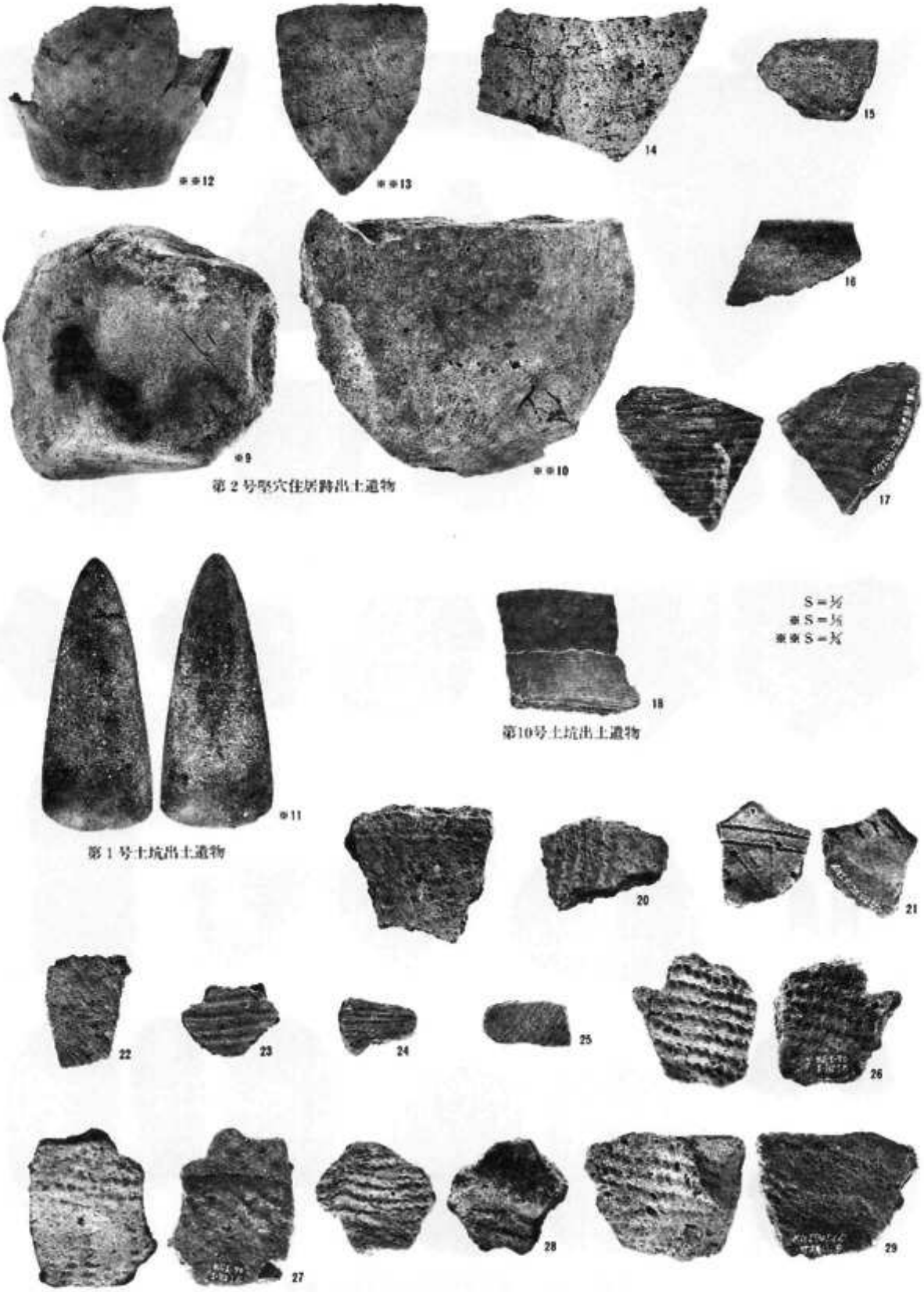
断面図

断面図

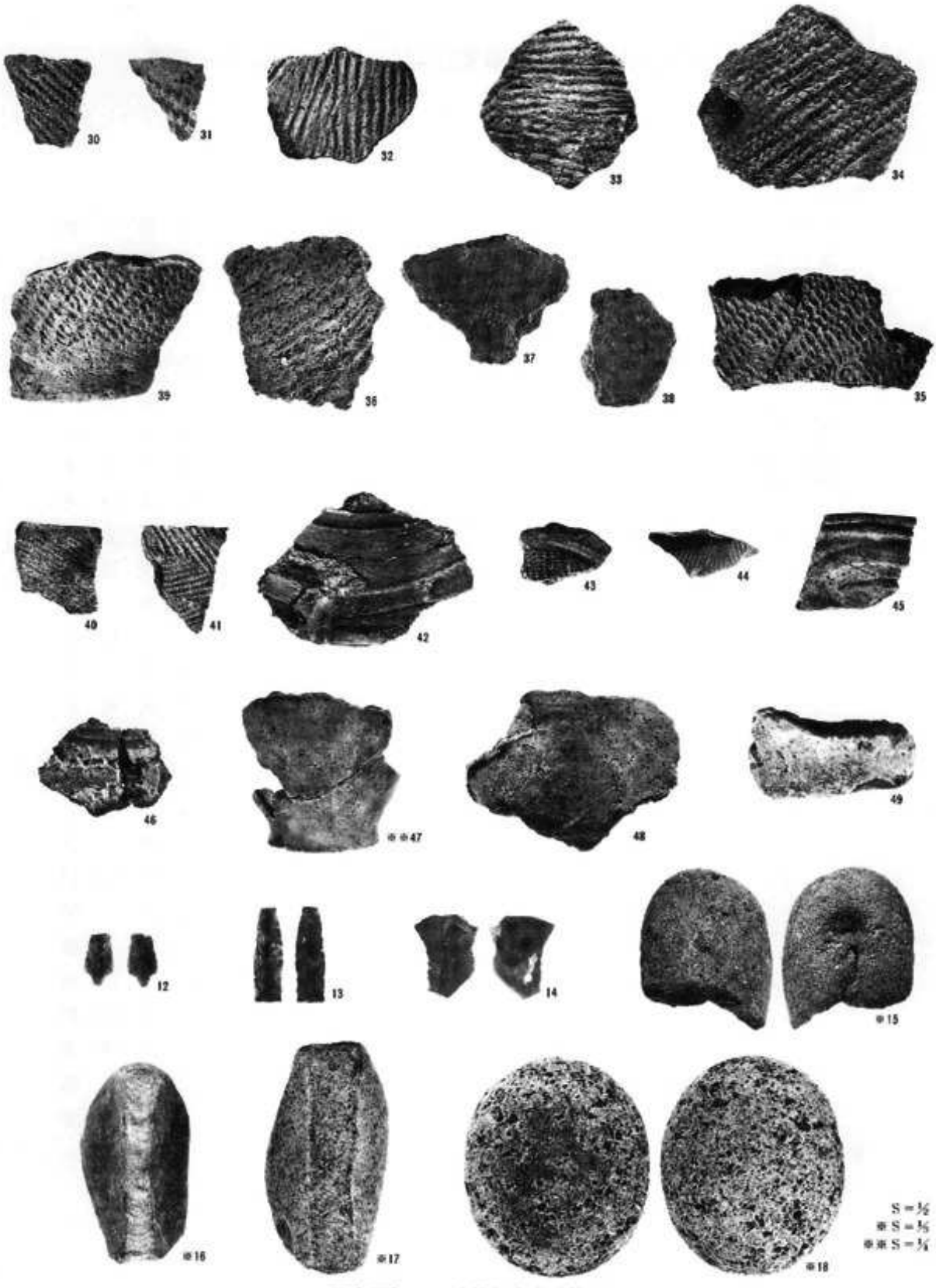
写真図版８　第１・２号陥し穴状遺構，第１・２・３・４・５号焼土遺構



写真図版９　第１号竪穴住居跡出土遺物



写真図版 10　遺構内・遺構外出土遺物 (1)



写真図版 11　遺構外出土遺物 (2)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長	小笠原 喜一
副所長	高橋 敬明

［管理課］

管理課長(兼)	高橋 敬明
課長補佐	森岡 陽一
主事	佐藤 理

［調査課］

調査課長	村上 康昭
課長補佐（第一班）	佐々木 嘉直
課長補佐（第二班）	鈴木 恵治
主任文化財専門調査員	小田野 哲憲
〃	三浦 謙一
〃	工藤 利幸
〃	高橋 與右エ門
〃	平井 進
〃	中川 重紀
〃	藤村 敏男
〃	高橋 義介
文化財専門調査員	斎藤 實
〃	佐瀬 隆
〃	千葉 孝雄
〃	斎藤 博司
〃	東海林 隆幹
〃	佐々木 弘
〃	川村 均
〃	鈴木 貞行
〃	伊東 格
〃	遠藤 修
〃	齋藤 邦雄
〃	神 敏明

［資料課］

資料課長	村松 義夫
主任文化財専門調査員	田鎖 寿夫
嘱託	吉田 一男
〃	根橋 文一
運転技士兼技能員	佐藤 春男
文化財専門調査員	佐々木 信一
〃	小原 眞一
〃	村上 修
〃	酒井 宗孝
〃	松本 建速
〃	笹平 克子
〃	花坂 政博
〃	佐々木 務
〃	金子 昭彦
〃	濱田 宏
期限付専門職員	鎌田 精造
〃	阿部 勝則
〃	安藤 邦彦
〃	星 雅之
〃	引屋敷 学
〃	鈴木 知己
〃	藤村 隆
〃	千葉 悟
〃	熊谷 博由
〃	新倉 信一郎
〃	山口 博英
〃	川村 聡
〃	八重座 のり子

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第175集

糀口Ⅰ遺跡発掘調査報告書

国道340号改良工事関連遺跡発掘調査

印刷　平成4年3月25日
発行　平成4年3月30日

発　行　㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185
TEL（0196）38－9001・9002

印　刷　川口印刷工業株式会社
〒020　盛岡市本町通2丁目13－8

© ㈶岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター1991